博 多 116

－博多遺跡群第159次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第946集

２００７

福岡市教育委員会

博多（はかた）116

－博多遺跡群（はかたいせきぐん）第159次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第946集

遺跡略号　HKT-159
遺跡調査番号　０５６６

２００７

福岡市教育委員会

序

福岡平野海岸部の砂丘上に位置する博多遺跡群には豊かな埋蔵文化財が今なお地下に残されており、発掘調査によって往時の暮らしぶりを物語る資料や、大陸よりもたらされた数多くの文物が次々と発見されています。遺跡を子々孫々に守り伝え、活用していくことは現代に生きる私たちの責務ですが、ほとんどが市街地の再開発にともなって発見されることから、その保護は困難な状況にあります。

福岡市教育委員会では、博多遺跡群を保護するとともに、開発によって破壊される場合には事前に発掘調査を実施し、記録の保存に努めています。本書は共同住宅建設工事に伴って実施した第159次調査成果について報告するものです。調査では太閤町割り以前の博多の町割りを示す道路跡などを確認するとともに、中国や朝鮮半島からもたらされた陶磁器をはじめとする大量の遺物が出土するなど、大きな成果をあげることができました。

調査に際し、地権者である波左間商事株式会社に快いご理解と多大なるご協力を賜りましたことを心よりお礼申し上げます。また、関係者のご尽力により、調査を円滑に進めることができましたことを深く感謝いたします。この報告書が幅広く活用され、文化財保護への理解を深める一助となれば幸いと考えます。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会
教育長　植木　とみ子

例　　言

1．本書は平成18（2006）年２月10日から４月10日に福岡市教育委員会が行った、福岡市博多区店屋町102・103-1外所在の博多遺跡群第159次発掘調査の報告書である。
2．発掘調査と整理報告は、民間の共同住宅建設に伴う受託事業として実施した。
3．検出遺構には３桁の連番号を付し、遺構の性格を示す記号として、SB（建物遺構）、SD（溝）、SE（井戸）、SF（道路）、SK（土坑）、SP（ピット）、SX（性格不明遺構）を頭に付した。
4．本書に使用した遺構実測図の作製は、吉武学、坂口剛毅が行った。
5．本書に使用した遺物実測図の作製は吉武、田中克子が行った。
6．銅銭の判読には、福岡市埋蔵文化財センターの協力を得た。
7．本書に使用した図の製図は田中、萩尾朱美が行った。
8．本書に使用した写真の撮影は吉武が行った。
9．本書の執筆は、土器を田中が、他を吉武が行った。備前焼は「間壁忠彦『備前焼』考古学ライブラリー60、ニューサイエンス社、1991」他、瀬戸焼は「藤沢良裕『瀬戸古窯址群－古瀬戸前期様式の編年－』瀬戸市埋蔵文化財センター紀要第3輯、財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター、1995」に基づき記述した。
10．本書に使用した方位は全て磁北である。
11．本書の編集は吉武が行った。
12．本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理・活用する。

遺　跡　名	博多遺跡群第159次調査		遺跡調査番号	０５６６	
遺 跡 略 号	HKT－159		調 査 地 地 籍	博多区店屋町102･103-1外	
開 発 面 積	416.14㎡	調査対象面積	156.32㎡	調 査 面 積	190㎡（×3面）
調 査 期 間	2006年（平成18年）2月10日～4月10日				

本　文　目　次

第一章　はじめに …… 1
　１．調査に至る経過 …… 1
　２．調査の組織 …… 1
　３．遺跡の地理的位置と歴史的環境 …… 2
第二章　発掘調査の記録 …… 4
　１．発掘調査の方法と経過 …… 4
　２．基本層序 …… 4
　３．発掘調査の概要 …… 6
　４．主な検出遺構と出土遺物 ……10
　　（１）建物遺構 ……10
　　（２）道路状遺構 ……11
　　（３）溝 ……12
　　（４）井戸 ……13
　　（５）石組み土坑 ……21
　　（６）土坑 ……23
　　（７）第３面トレンチ出土遺物 ……30
　　（８）その他の出土遺物 ……32
第三章　おわりに ……40

挿　図　目　次

Fig.１　博多遺跡群の位置と地形（1/25,000）……２
Fig.２　周辺の発掘調査地点（1/2,000）……３
Fig.３　調査区の位置（1/500）……３
Fig.４　調査区の土層断面（1/80）……５
Fig.５　第１面の遺構配置（1/80）……７
Fig.６　第２面の遺構配置（1/80）……８
Fig.７　第３面の遺構配置（1/80）……９
Fig.８　SB-112・113、SX-114（1/40）……10
Fig.９　SF-030（1/40）……11
Fig.10　SF-030出土遺物（16～18は1/4、他は1/3）……12
Fig.11　SD-108（1/40）……13
Fig.12　SD-108出土遺物（1/3）……13
Fig.13　SE-015（1/40）……14
Fig.14　SE-015出土遺物（47は1/4、他は1/3）……15
Fig.15　SE-020（1/40）……16
Fig.16　SE-020出土遺物（1/3）……16
Fig.17　SE-075（1/40）……17

Fig.18　SE-075出土遺物（65は1/4、他は1/3）……18
Fig.19　SE-080（1/40）……19
Fig.20　SE-080出土遺物（1/3）……19
Fig.21　SE-111（1/40）……20
Fig.22　SE-111出土遺物（88は1/4、他は1/3）……21
Fig.23　SK-005（1/40）……21
Fig.24　SK-005出土遺物（94は1/4、他は1/3）……22
Fig.25　SK-023（1/40）……22
Fig.26　SK-002・016・043・044・077・078・079（SK-079のみ1/30、他は1/40）……24
Fig.27　SK-002・016・043・044・077・078出土遺物（113・114は1/4、他は1/3）……25
Fig.28　SK-079出土遺物（1/3）……27
Fig.29　SK-094・095・099・100・107（1/40）……28
Fig.30　SK-094・095・099・100出土遺物（162～164は1/4、他は1/3）……29
Fig.31　第３面トレンチ１・トレンチ３出土遺物（1/3）……31
Fig.32　その他の出土土器１（1/3）……33
Fig.33　その他の出土土器２（1/3）……34
Fig.34　その他の出土土器３（1/3）……36
Fig.35　その他の出土土器４（1/3）……37
Fig.36　その他の出土土器５・土製品（363・364は1/2、他は1/3）……38
Fig.37　石製品・銅製品・鉄製品・ガラス製品（387～389は1/1、他は1/3）……39
Fig.38　銅銭（1/1）……40

図　版　目　次

扉　調査風景（北西から）
PL.1　1．第１面全景（北西から）　2．第２面全景（北西から）
PL.2　1．第３面全景（北西から）　2．SB-112（南から）
PL.3　1．SF-030検出状況（北西から）　2．SF-030掘り下げ後（北西から）
PL.4　1．SE-015完掘後（北西から）　2．SE-020井側検出状況（北から）
PL.5　1．SE-075井側検出状況（南から）　2．SE-075井側（南から）
PL.6　1．SE-080井側検出状況（北から）　2．SE-111井側検出状況（北から）
PL.7　1．SK-005（南から）　2．SK-023（南東から）
PL.8　1．SK-079（南から）　2．SK-079（北西から）
3．SK-002（南東から）　4．SK-077（北東から）
5．SK-078（南西から）
PL.9　1．SK-094（南から）　2．SK-095（南西から）
3．SK-099（北西から）　4．SK-100（東から）
5．第３面トレンチ（西から）
PL.10　出土遺物（縮尺不同）

第一章　はじめに

1．調査に至る経過

博多湾沿岸の砂丘上に形成された博多遺跡群が中世貿易都市の姿を今に伝える重要遺跡として注目されて、はや30年が経過した。福岡市教育委員会では博多遺跡群を保護するため、ビル建設などの開発行為が予定された場合には事前に試掘調査を行って遺跡の状況を確認するとともに、現状保存が困難な際には地権者等の協力を得て記録保存のための緊急発掘調査を行っている。

平成16年、福岡市博多区店屋町102・103-1において、波左間商事株式会社による共同住宅建設が計画され、福岡市教育委員会あてに9月27日付けで埋蔵文化財の有無についての照会があった。申請地は、福岡市文化財分布地図上では博多遺跡群に含まれ、かつ、西側の隣接地では1979年に第2次調査が、南側隣接地では2002年に第135次調査が行われており、地下に遺跡の存在することが確実視された。このため、教育委員会埋蔵文化財課では試掘調査を行う必要がある旨を回答し、既存建物を避ける形で対象範囲西側に対し10月19日にトレンチ調査を実施した。この結果、地表下1.5m以下で中世の遺構または包含層を確認し、少なくとも4面以上の遺構面についての調査が必要となると判断した。ただし、既存建物の基礎が2m前後まで達しているとみられ、上部は破壊されている可能性が考えられた。

試掘の結果を踏まえ、埋蔵文化財課では申請者と協議を持ったが、予定建築物が杭打ちを伴う11階建て建築物であるため地下の遺跡への影響は避けがたい状況にあり、やむなく記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は平成18年2月10日から4月10日までの2カ年度にまたがって埋蔵文化財課が民間受託事業として実施し、整理報告書作成は平成18年度にやはり受託事業として行った。

2．調査の組織

調査は以下の組織で行った。

調査委託　波左間商事株式会社

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　植木とみ子

調査総括　埋蔵文化財課（現第1課）長　山口譲治
埋蔵文化財課調査第2係長　池崎穣二（前）、埋蔵文化財第1課調査係長　山崎龍雄（現）

調査庶務　文化財整備課（現文化財管理課）管理係　鈴木由喜

調査担当　埋蔵文化財（現第1）課事前審査係　久住猛雄・本田浩二郎（試掘調査・事前協議担当）
埋蔵文化財課調査第2係（現埋蔵文化財第1課調査係）　吉武　学（発掘調査担当）

調査協力　坂口剛毅（技能員）、池田省三、江島光子、加藤常信、唐島栄子、近藤澄江、坂下達男、清水　明、関　哲也、大長正弘、高野瑛子、谷　正則、中村桂子、中村尚美、永松トミ子、布江孝子、原　勝輝、三浦　力、山内　恵、山下智子、結城フヂ子、吉住政光、吉田恭子（五十音順、敬省略）

整理協力　田中克子（技能員）、下山慎子、萩尾朱美、森　寿恵（五十音順、敬省略）

事業主の波左間商事株式会社には調査についてご理解頂くとともに、多大なるご協力を賜りました。また、施工業者の株式会社旭工務店には条件整備等についてご尽力頂きました。深く感謝致します。

3．遺跡の地理的位置と歴史的環境

博多遺跡群は、博多湾岸に形成された砂丘と、その後の河川の堆積作用及び人為的な埋め立てにより形成された微高地に立地する。基盤砂丘には三つの高まりがあり、陸側の二つが「博多浜」、海側の一つが「息浜」を形成する母体となっている。この二つの浜が接する部分は古くは川が流れ、10・11世紀頃は湿地であったが、やがて埋め立てにより両砂丘をつなぐ陸橋が作られ、13世紀にはこの陸橋を越えて生活領域が息浜に及んだが、その後の埋立ては陸橋部の周辺に留まり、北東と南西から食い込むような形で湿地が17世紀初めまで残っていた。第159次調査地点はこの二つの浜が接する部分から南西にやや離れており、博多浜の砂丘が北西へと落ちた部分に立地するとみられる。

近隣には既往調査地点が少なからずあり、この報告の中で周辺の埋没砂丘の範囲推定と中世から近世初期にかけて行われた埋立てについての考察もあり、その後にこれを追認した調査もある。第110次調査（以下「110次」と略す)、135次では基盤層である砂丘上に遺構が確認され、このラインより北ないし西は砂丘が急激に落ちることが分かった。このラインの東側は築港線3次の方向へ伸びていく。110次では砂丘は標高2.3～2.9mで北西に緩く下るが、西隣の14次では標高0m付近まで一気に落ちる。135次は未報告だが標高1.1m～1.9mに砂丘面が存在し北へ傾斜し、古代末～中世前半まで遡る遺構を検出している。この北隣の本159次では砂丘砂層は存在せず、生活域に含まれたのは遡っても14世紀以降である。このように、砂丘ラインの北～西に位置する調査では砂丘砂層は認められず、埋立て層の上面で遺構を確認している。87次では14世紀代に、124次では15世紀だが調査区の南側に留まり、61次では13世紀中頃に、95次では14世紀前半に、それぞれ遺構の初現が認められる。

博多遺跡群は弥生時代中期に集落が現れて以降、博多浜を中心に遺跡が発達し、13世紀末頃から一帯に道路遺構が展開する。その後は中心が博多浜から息浜へと移って行ったとみられ、15世紀には博多浜では遺構・遺物が少なくなり、対照的に息浜を中心とする遺跡群の北半にそれが集中する。貿易陶磁器の大量かつ多種の出土から、対外貿易によって栄えたと考えられる。16世紀頃には戦禍によるとみられる焼土層等が多く残り、近世初期には大規模な整地や埋立てが行われたとみられる。

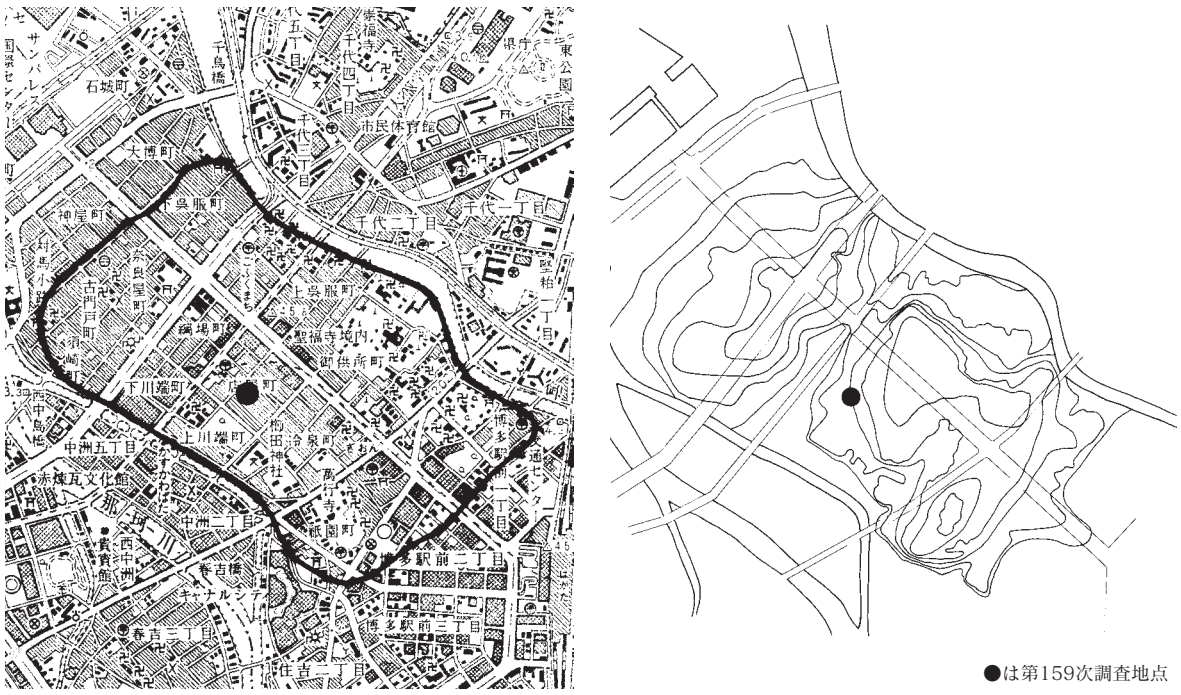


Fig. 1　博多遺跡群の位置と地形（1/25,000）

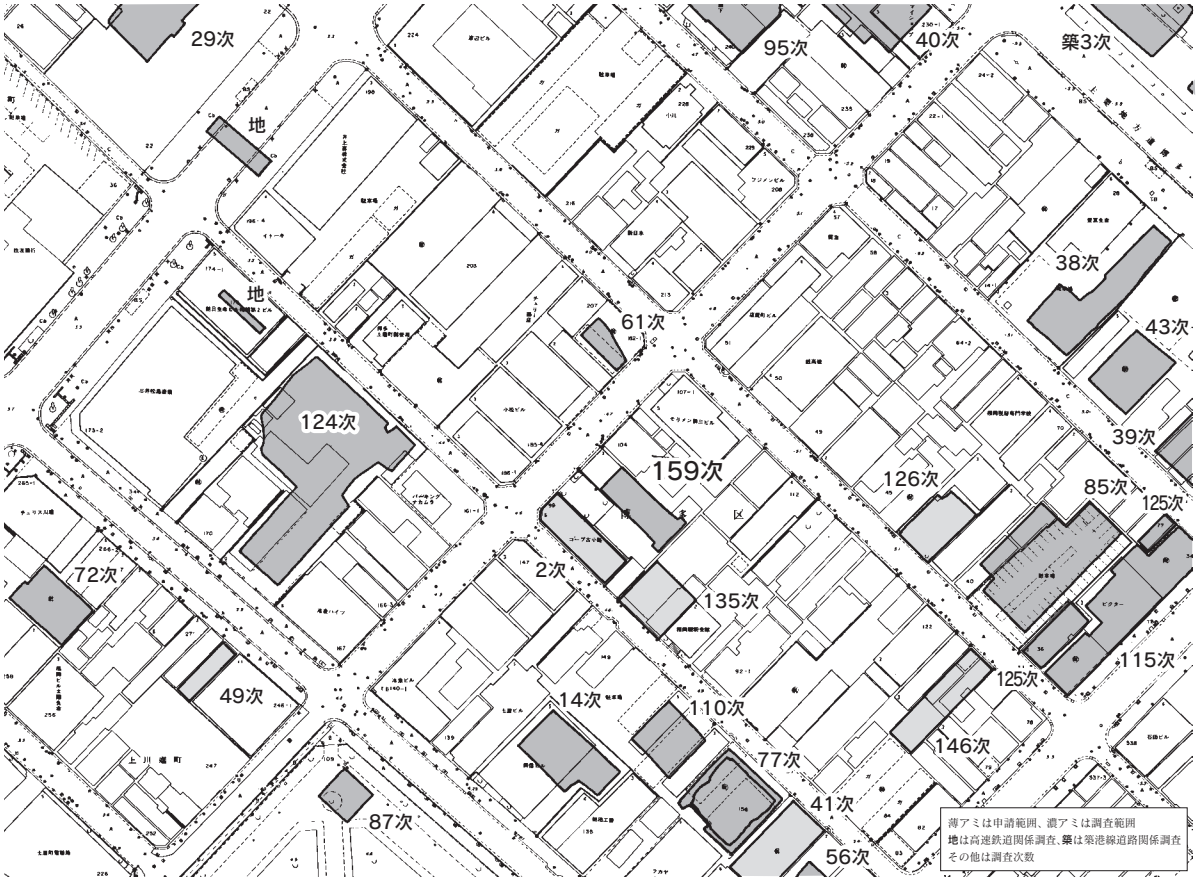


Fig.2　周辺の発掘調査地点(1/2,000)

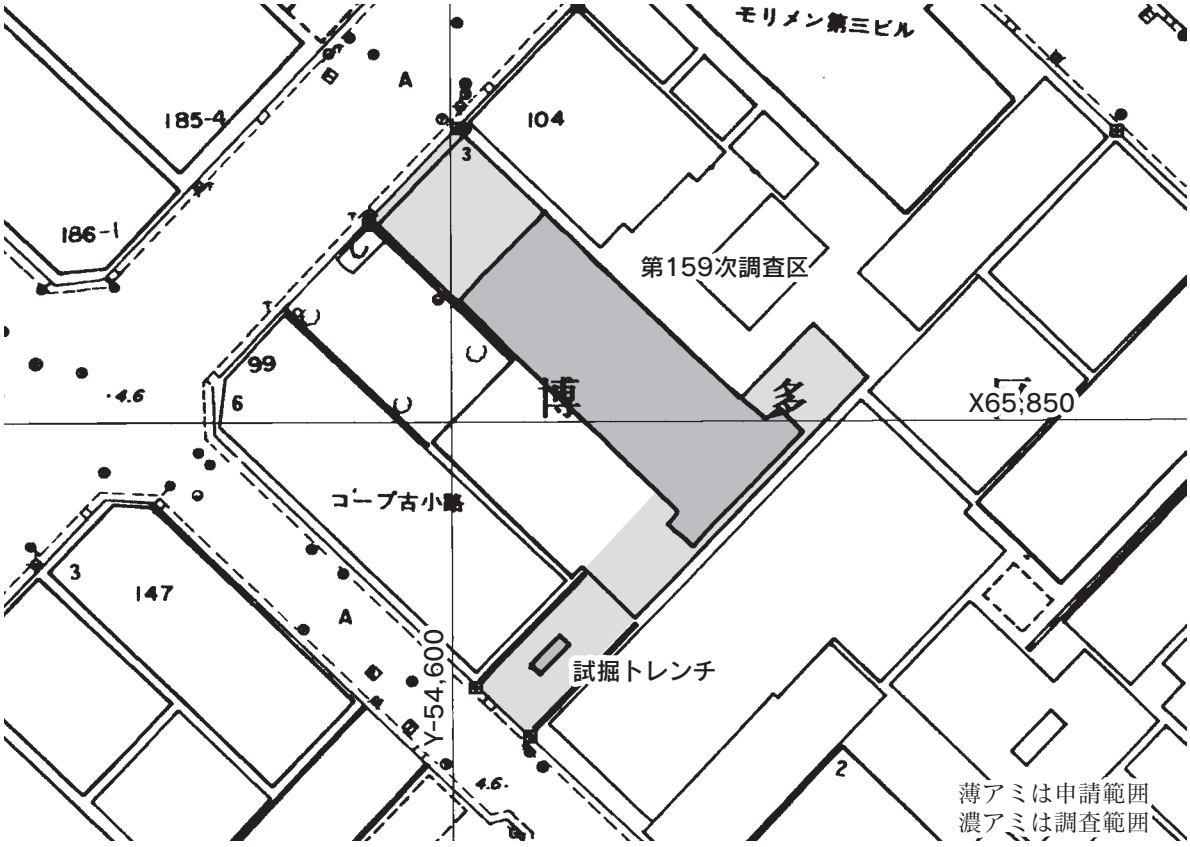


Fig.3　調査区の位置(1/500)

第二章　発掘調査の記録

1．発掘調査の方法と経過

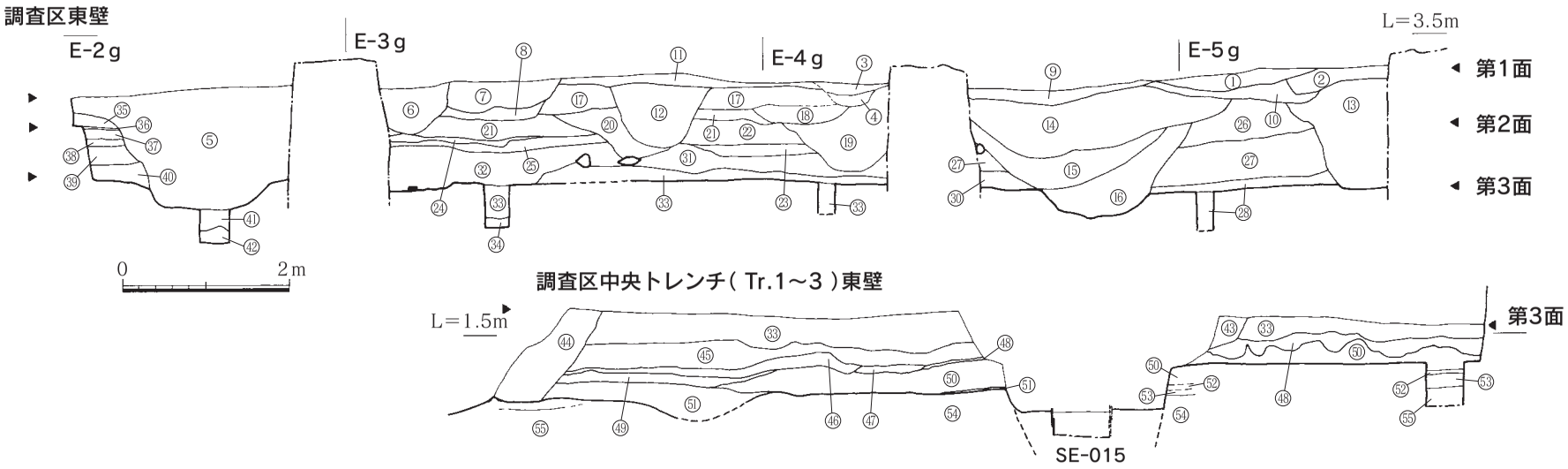
調査に先立ち、施工業者（株式会社旭工務店）が平成18年1月下旬に杭打ち先行工事、1月末にシートパイルを打設した後、2月4～6日に調査担当者立ち会いのもと、表土のスキ取りと搬出を行った。試掘調査結果から、地表下1.5mで中世の遺構面となると予想されたが、既存建物の基礎が地表下1.8mの深さまで及んでいたため、ここまで重機で除去した。発掘作業は、条件整備が整った2月10日から開始し、地表下1.8mを第1面として遺構確認作業を実施した。第1面終了後は、人力で掘り下げながら人為的な遺構面を設定して調査を進め、計3面で遺構検出を行った。調査期間中は雨天の日が多く、湧水に悩まされたが、4月10日に全ての作業を終了し撤収した。

申請地は現在の街区に沿って北西－南東に細長く、調査対象範囲には鋼矢板による山留め壁設置工事が行われ、全域に地表から0.5mのあたりに支保鋼が張り巡らされた。この支保鋼は第1面では高さ1.5mあたりのレベルを巡り、ちょうど作業員の頭部付近にくるため大変危険であった。Fig.3のとおり対象地南側はT字形をなしているが、東西に張り出した部分は頭上の支保鋼のため特に危険であり、調査対象から除外した。排土置き場は北側空閑地を使用したが狭く、調査対象地の北端を排土置き場に当てたため一部が未調査となった。更に、調査区東西には土層観察のためのベルトを幅50㎝で残した。従って、調査区の上端の面積は190㎡であるが、下端での実質調査面積は第1面が140㎡、第2面が126㎡、第3面が122㎡である。第3面以下は自然堆積層と考えられ、トレンチ調査を行って堆積状況の確認を行った。第3面に設定したトレンチは12㎡で、調査面積の合計は400㎡となる。

調査に際しては調査区の形状に合わせて任意にグリッドを組み、東からE、W、北から1～5と呼称して包含層出土遺物を取り上げ、遺構実測の基準線としても使用した。本文中においても遺構の位置はこのグリッド名称で示している。その後、『博多地区遺跡基準点測量委託測量成果簿（平成4年3月）』の成果を利用して国土座標（第Ⅱ系）上に位置づけた。実測図に使用した標高もこれによった。

2．基本層序　Fig.4

調査区東壁で第1～3面間の土層を、中央に設けたトレンチで第3面以下の土層堆積状況を記録したが、井戸や土坑などの遺構が切り込んで寸断され、当地点の土層堆積状況を表現したものとはなっていない。調査中の所見では、E・W－4グリッドを境として、その南北で地層の堆積状況が大きく異なっていることが確認できた。すなわち、砂丘に近い南側のE・W－5グリッドでは黒褐色粘質土（下位では砂質土へ漸移する）が1.5mにわたり厚く堆積しており、層に混雑物がほとんど含まれないことから一気に埋め立てられたと考えられる。この黒褐色粘質土は第1面ですでに露呈しており、それより上部は旧建築物により破壊されている。黒褐色粘質土の下層は、薄い黒色粘質土（ヘドロ状の堆積層）と細砂層（黒色帯を挟む、砂丘の二次堆積層か）を経て河床である砂礫層（標高0.9m）となり、白磁片を多く含む。他方の北側E・W－2～3グリッドでは、人為的埋立てによると思われる整地層（砂質土や砂層からなる）の下層は、黒褐色砂質土を経て、ヘドロ→細砂→ヘドロ→細砂→砂礫（河床、標高0.6m）へと変化する。以上のような堆積層の状況から、調査区は砂丘の川岸に近い河床内に相当する部分にあたっており、これの砂丘に近い部分（調査区南端）は黒色土で一時期に埋め立てられ、他方の北側は湿地と化した後、徐々に埋め立てられていったと推定される。



① 焼土、炭
② 灰青色砂質土
③ 暗褐色粘質土
④ 暗褐色砂質土（砂帯を挟む）
⑤ SK-079を参照
⑥ 暗灰褐色砂質土（遺構）
⑦ 灰褐～黄褐色砂～砂質土
⑧ 灰褐色砂質土
⑨ 黒褐色砂質土
⑩ 黒褐色砂質土
⑪ 黒褐色粘質土
⑫ 暗灰褐色砂質土
⑬ 黒色砂質土（SE-080掘り方）
⑭ 暗褐色砂質土（細砂・炭をレンズ状に挟む）
⑮ 黒色砂質土
⑯ 黒色粘質土
⑰ 暗褐色砂質土
⑱ ⑰に近似し、少し暗い
⑲ 暗褐色砂質土（⑱より明るい）
⑳ 灰黒色砂質土
㉑ 暗褐色砂質土（灰褐色砂含む）
㉒ 暗灰褐色砂質土
㉓ 灰色砂（粗・細砂混じる）
㉔ 暗褐色砂質土（炭を帯状に挟む）
㉕ 灰色細砂
㉖ 黒褐色粘質土
㉗ ㉖に近似し、より明るい
㉘ 暗褐色細砂（やや粘質）
㉙ 黒褐色砂質土
㉚ 細砂＋暗褐色粘質土ブロック
㉛ 黒色砂質土（炭含む）
㉜ 暗褐～黒褐色砂質土（細砂含む）
㉝ 黒色砂質土
㉞ 灰黒色砂
㉟ 暗褐色砂質土
㊱ 黄白色細砂
㊲ 暗褐色粘質土
㊳ 灰褐色粘質土
㊴ 暗褐色砂質土
㊵ 黒色砂質土（炭含む）
㊶ 黒色砂質土（混じり少なく砂質強）
㊷ 灰黄色砂＋黒色砂ブロック
㊸ 黒色砂質土（やや明るい）
㊹ SE-111掘り方
㊺ 黒色砂質土＋灰～濁黄色砂
㊻ 黒色粘質土
㊼ 灰黒色粘質土
㊽ 黒色粘質土
㊾ 濁灰色細砂
㊿ 黒色粘質土ブロック＋灰色細砂
51 黒色粘質土（ヘドロ）
52 黒色粘質土
53 灰～黄白色細砂
54 灰～暗黄白色細砂（やや硬質）
55 粗砂（河底）

Fig.4　調査区の土層断面（1/80）

3．発掘調査の概要

試掘調査の概要

試掘調査地点は今回の調査範囲外にある（Fig.3参照）ため、トレンチ所見について掲載しておく。

申請地には3階建ての既存建物が残っており、申請地の西側の狭い空地の一部にトレンチを設定した。調査面積2.8㎡。地表下75㎝で現代の攪乱層から暗黄褐色土層（近代？）に変わり、120㎝以下で暗褐色砂質土、150㎝で暗褐色～黄褐色砂質土層となり、中世末の遺物を含む。170㎝～230㎝は黒灰褐色砂質土となるが、包含層か遺構覆土か不明である。230㎝でにぶい黄色～黄灰褐色砂となり、この面で遺構が確認できる。250㎝で暗褐色砂となり、265㎝まで深掘したが砂丘は確認できない。

以上の試掘結果より、地表下150～160㎝以下は中世の遺構覆土もしくは包含層と考えられ、以下には良好に遺構面が遺存している。基盤である砂丘面を確認できなかったため明確ではないが、4面以上の調査が必要となろう。既存建物の基礎構造は地表下200㎝以内と考えられ、遺跡上層部は破壊されている可能性があるが、それ以下には影響が及んでいないと考えられる。予定される建造物は杭打ちを伴う11階建てマンションであり、工事に先立って発掘調査が必要である。

第1面の概要　Fig.5、PL.1

上記の試掘結果に基づき地表下150～160㎝以下を調査対象としたが、地表面から180㎝前後まで前建物による破壊が及んでいたため、重機による表土除去後、この面を第1面として遺構検出を行った。遺構面のレベルは南端で標高3.1m、北端で2.6mを測り、南端は黒褐色粘質土、北側は砂質土等の混在する埋立て層である。前建物の基礎による攪乱が一部残り、この除去にかなりの労力を消費した。また、調査に先行して打設された建物基礎杭により一部の遺構が破壊されている。

検出した遺構は、道路状遺構1、井戸5（うち2は瓦井戸）、石積み土坑2、土坑19、小ピット7、攪乱坑8である。近世（18世紀以降）の井戸・土坑、近現代の攪乱坑が多い。中世の遺構は道路状遺構1、井戸2、石積み土坑2、及び土坑数基である。第1面は16世紀後半頃の生活面と考えられる。

第2面の概要　Fig.6、PL.1

第1面で掘り下げた遺構の壁面観察により、下層に細砂層が面的に広がることが確認できたため、この層を目処に50㎝前後掘り下げて遺構面を設定した。ただし、細砂層の広がりは調査区北半部に限られ、南端は第1面と同様の黒褐色粘質土である。標高は南端で2.4m、北端で2.3mである。

検出遺構は、井戸2、土坑16、小ピット2のみである。全て中世の遺構で、16世紀前半～後半の時期と考えられる。第1面の検出漏れを含むと考えられ、16世紀前半頃の生活面か。

第3面の概要　Fig.7、PL.2

調査区全域に黒褐色砂質土が広がっており、この面まで人力で掘り下げ第3面とした。この層は混じりけが少なく自然堆積層と考えられ、上位層が炭化物等を含んでいるのとは対照的である。遺構面の標高は南端で1.8m、北端で1.6mである。

検出遺構は、建物基礎2、溝1、土坑11、小ピット6である。15世紀後半から、一部には16世紀後半までの遺物を含むものがあり、上面で検出すべき遺構の見落としと考えられる。14世紀まで遡る可能性がある土坑2基がある。

第3面トレンチの概要　PL.9

第3面の遺構面とした黒褐色砂質土以下は自然堆積の状況を呈しており、砂丘の二次堆積と考えられる細砂や流木等を含む黒色粘質土層を挟んで河床とみられる砂礫層となる。砂丘に近いトレンチ南半からは12世紀中～後半の遺物が、北半からは14世紀前半までの遺物が出土した。

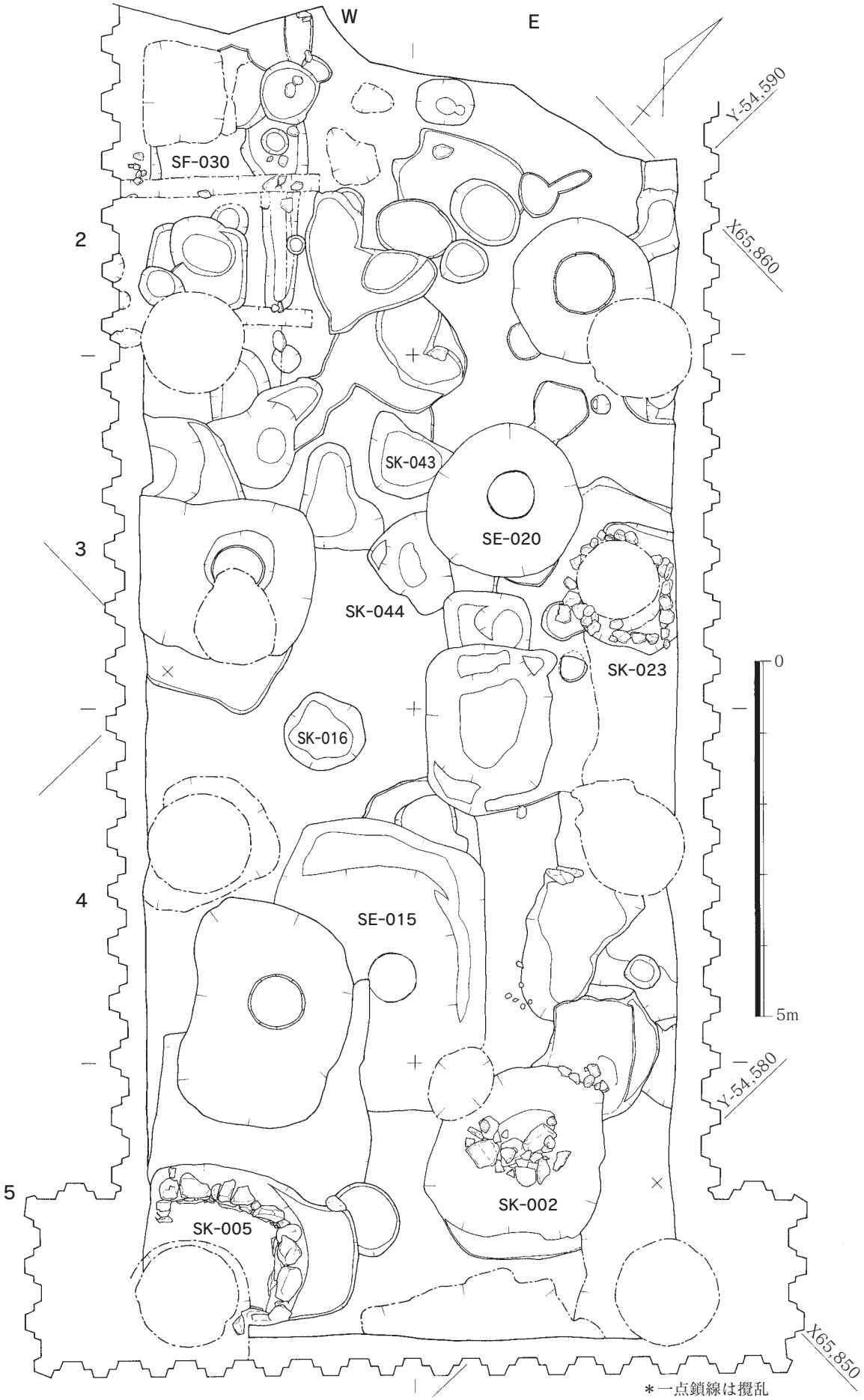


Fig.５　第１面の遺構配置（1/80）

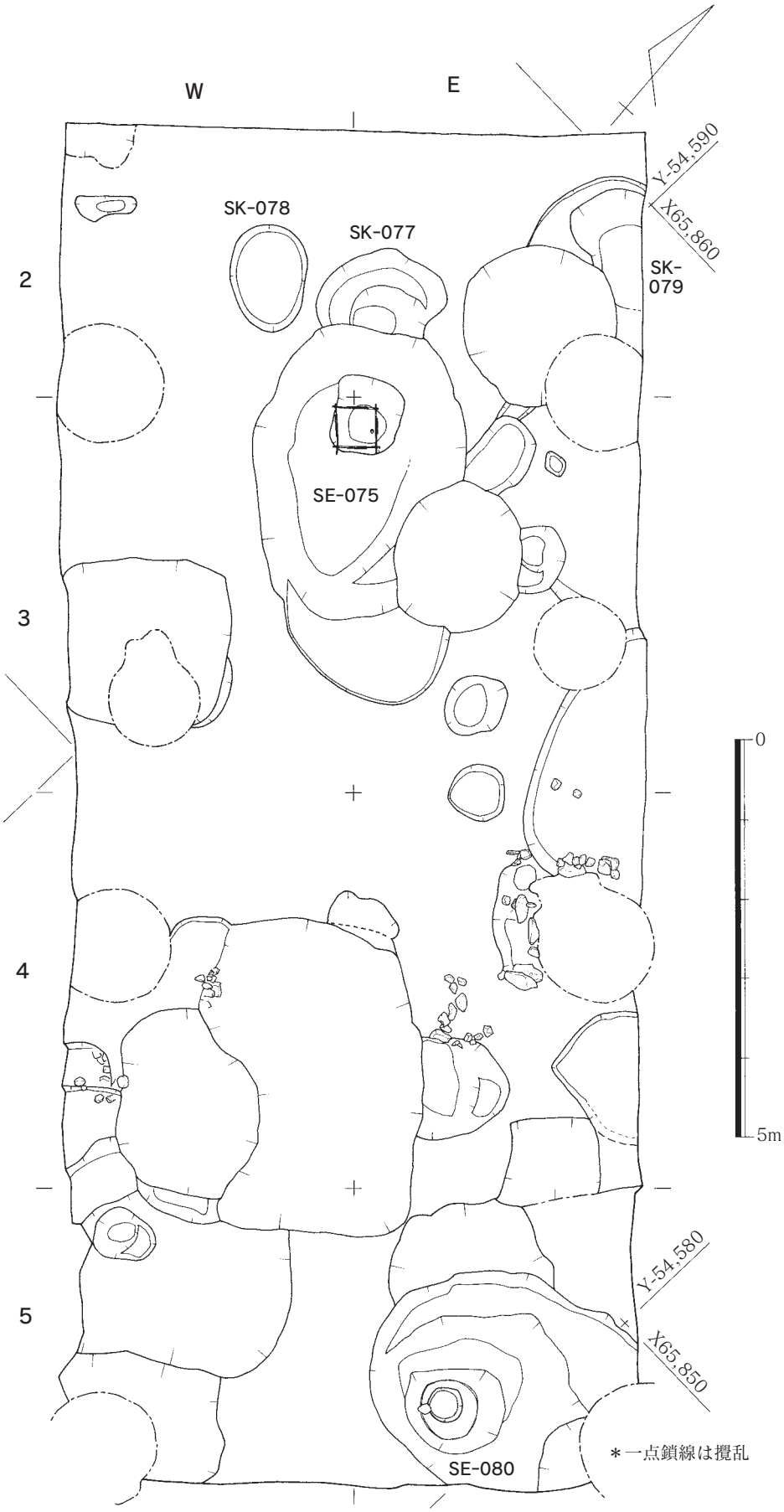


Fig.6　第２面の遺構配置（1/80）

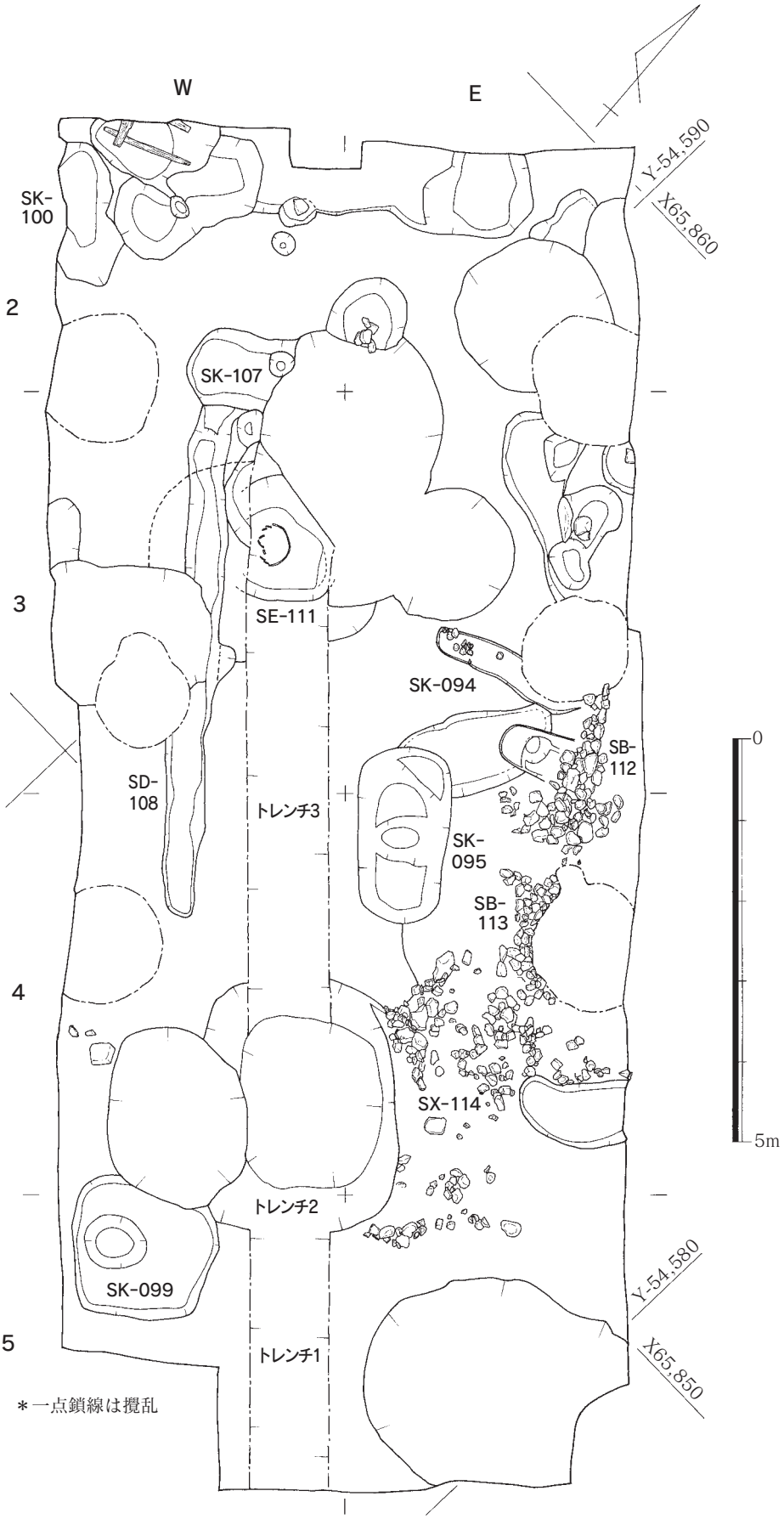


Fig.7　第３面の遺構配置（1/80）

4．主な検出遺構と出土遺物

（1）建物遺構

SB－112・113　Fig.8、PL.2

第3面のE-3～4グリッドに検出した。第2～3面間の包含層中から礫が多数出土し、うちSB-112とSB-113は礫群の上面が揃っており、建物基礎の一部とみられる。北半がSB-112、南側に少し間を置いてSB-113があり、両者には30㎝ほどのレベル差があり、連続しない。SB-112は礫の上面の標高が2.1mに揃い、スミアミで示した礫の東面が直線的に並ぶ。北端は調査区外へと伸び、南側は西へ直角に曲がるようである。南北長2m、東西幅0.9m。SB-113は調査に先立って打たれたコンクリート杭によって攪乱されているが、礫の上面は標高1.8m前後に揃い、南北長は1.5mである。また、SB-113の南側にはSX-114とした礫群があるがまとまりがなく、土砂とともに投げ込まれたと考えられる。包含層掘り下げの際に遺物が出土したが、これらの遺構に明確に伴うと考えられる遺物はない。

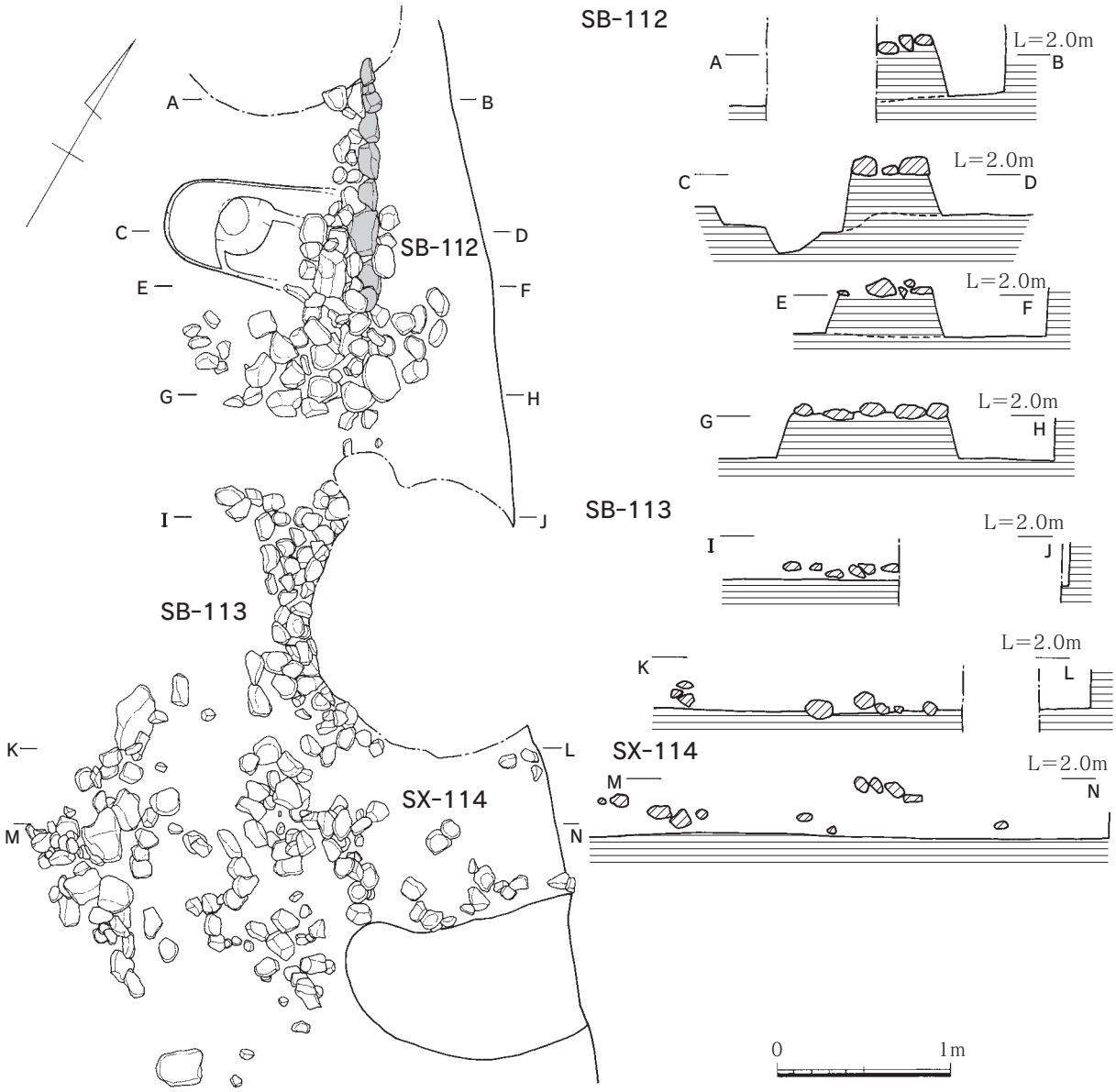


Fig.8　SB-112･113､SX-114(1/40)

(2) 道路状遺構

SF－030　Fig.9、PL.3

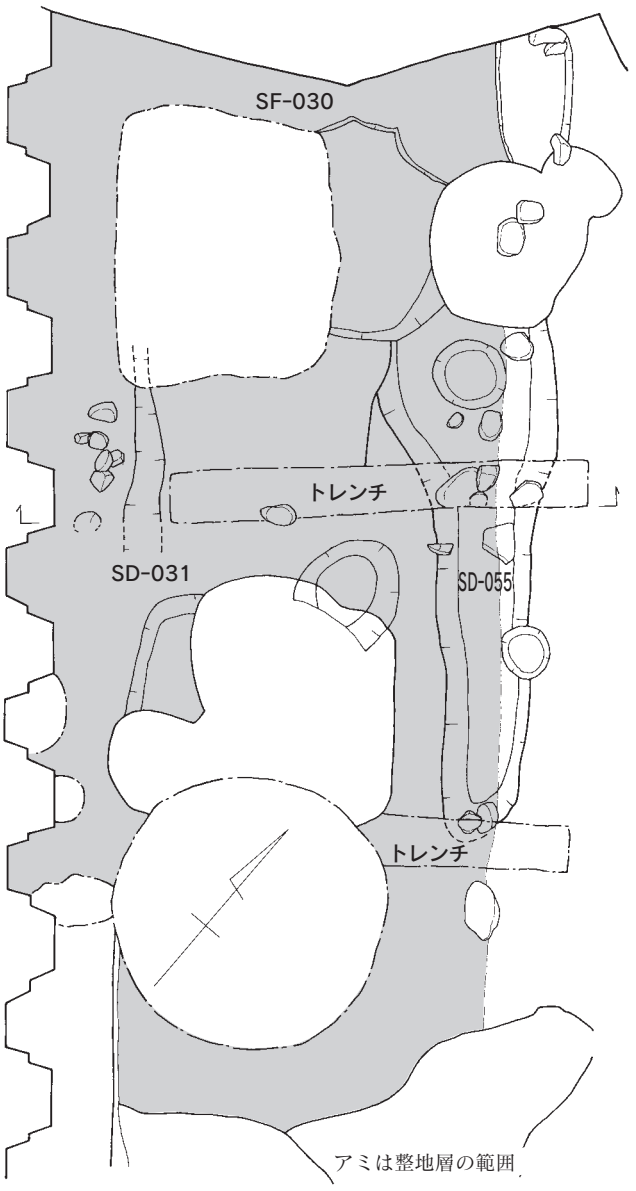
第1面のW-2～3グリッドに検出した。炭化物層、粘土層、砂層などの薄い堆積層が厚さ30㎝ほどにわたって重なっており、かさ上げによって生じた道路の整地層と考えられる。アミで示した部分が整地層の範囲で、確認した範囲が極めて狭いが、磁北から40°西偏と計測でき、現在の街区の方位にほぼ等しい。西側は調査区壁際まで続いており、現状で長さ6m、幅2.5m以上を測る。北端は調査区外へと伸びる。南側は井戸・土坑に切られているが、更にその南側には検出できず、地形が南へ高いため削平消滅している可能性が考えられよう。検出面での標高は2.4～2.7mで、北へ緩く下る。中央の横断土層断面に示した⑭層までがこの道路に伴う層で、以下はそれ以前の整地層ないし別の遺構とみられる。道路層の東端には溝状の浅い窪みが二つ以上観察され（⑦・⑨層）、東側溝の可能性があるが、平面プランは極めて不鮮明でつかみにくい。掘り直したとすれば、下層の溝は幅0.7m、上層の溝は幅0.4mで、深さはともに20㎝前後である。西端にも側溝の可能性がある上面から切り込む浅い窪み（①層）が観察されるが、平面プランではほとんど確認できず、確証をもてない。

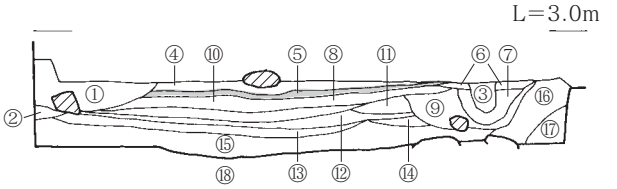
博多遺跡群では磁北から西偏する「縦筋」の道路がこれまでに3条ほど確認されているが、それらに比べると整地層が極めて薄く、貧弱な印象を受ける。

整地層をSF-030、東側溝をSD-055、西側溝をSD-031として遺物を取り上げた。

SF－030出土遺物　Fig.10

土師器小皿・坏（底部糸切り＝以下では「糸」と記す）、瓦質・土師質土器、国産陶磁器（備前）、中国産陶磁器（宋代白磁、同安窯系青磁、南宋～明代竜泉窯系青磁、明代青花）、朝鮮王朝陶磁、石製品が少量出土した。





① 灰褐色砂質土
② 暗灰褐色砂質土
③ 灰褐色砂質土
④ 暗灰褐色土
⑤ 炭
⑥ 灰褐色砂質土
⑦ 灰褐色砂質土（側溝？）
⑧ 細砂と灰褐色粘質土の互層
⑨ 灰褐色砂質土（側溝？）
⑩ 暗灰褐色粘質土
⑪ 灰褐色砂質土
⑫ 灰黄～灰白色細砂
⑬ 暗灰褐色粘質土
⑭ 暗灰褐色粘質土と細砂の互層
⑮ 灰褐色砂質土（⑯のブロック含む）
⑯ 灰白色砂（しまる）
⑰ 灰褐色砂質土
⑱ 淡灰色粘質土

0　1m

Fig.9　SF-030(1/40)

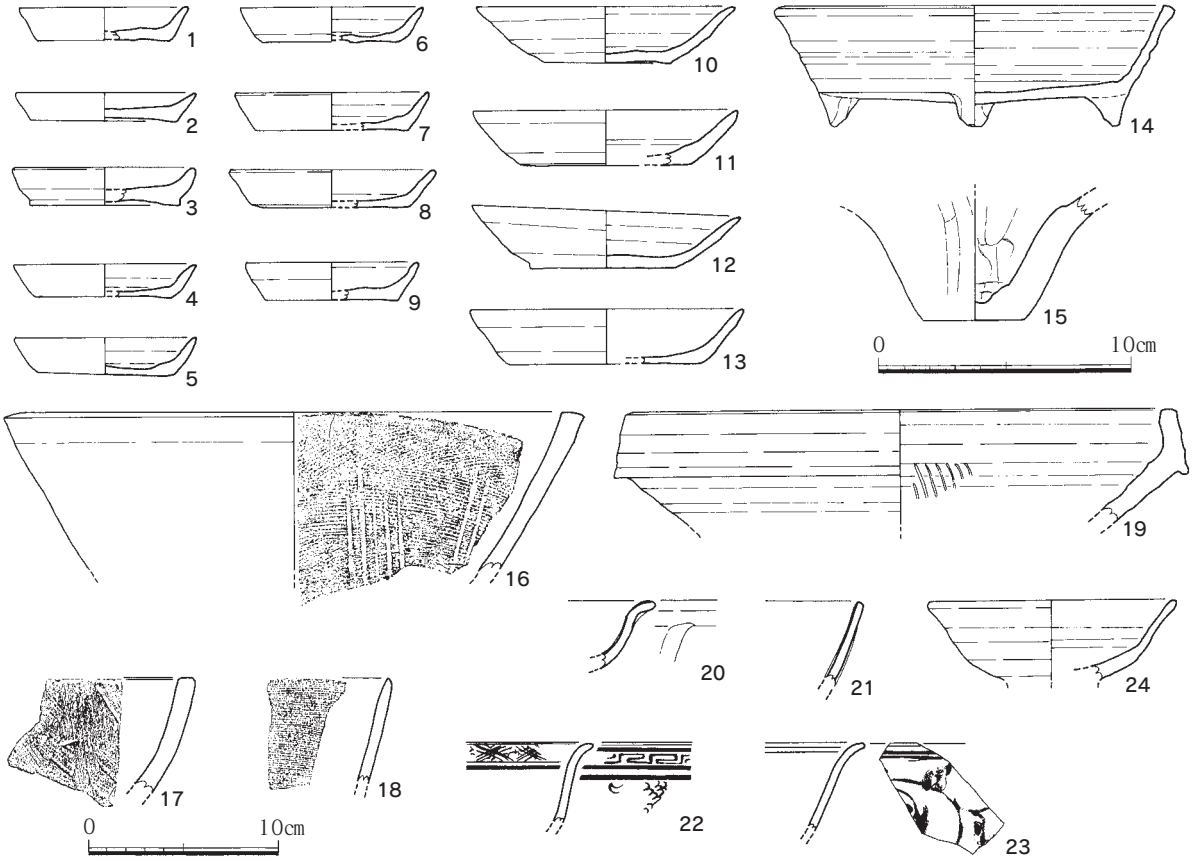


Fig.10　SF-030出土遺物（16～18は1/4、他は1/3）

1～9は土師器小皿で、口径は6.6～8.2cm、器高は1.1～1.5cmの範囲にある。**10～13**は土師器坏で、口径は10.4～10.8cm、器高は2.2～2.3cmの範囲にある。**14**は土師器の脚付き坏で、大形品。口縁端部を面取し、外底の四方に断面三角形の低い脚が付く。内面に油煙の痕がかすかに残る。胎土は白色精良で、内外面にロクロ目を残す。口径15.8cm、器高4.7cm。**15～17**は瓦質土器である。15は器種不明で、外面に丁寧なミガキを施すが、内面の調整は粗い。16はすり鉢で、スリ目は5本一組。17は浅鉢で、内面に細かい刷毛目調整を施す。**18**は土師質の土鍋で外面に煤が付着する。**19**は備前焼すり鉢でⅣB期。

20・21は竜泉窯系青磁碗である。20は外面に片切彫の蓮弁文が入り南宋後期、21は明代前半のものである。**22・23**は明代前半の青花端反り碗である。**24**は朝鮮王朝陶磁で、刷毛で全面に白化粧土を施す刷毛粉青碗である。胎土に夾雑物が多い。

出土遺物より遺構の時期は16世紀前半代と考えられる。

(3) 溝

SD－108　Fig.11

第3面のW-3～4グリッドに検出した浅い溝である。主軸方位は磁北から35°西偏し、北端は土坑に切られており、その更に北側には伸びない。南端は浅くなって消滅する。長さ6.5mを測り、溝幅は0.5mを前後する。深さは概ね15cmで、南北端の底面でレベル差はなく、水平である。道路状遺構SF-030と重複する位置にあり、主軸方位も近い。両者は検出面間で1mの差があり、SF-030最下層とSD-108検出面でのレベル差も0.7m離れているが、道路に先行する区画を示す溝の可能性もあろう。

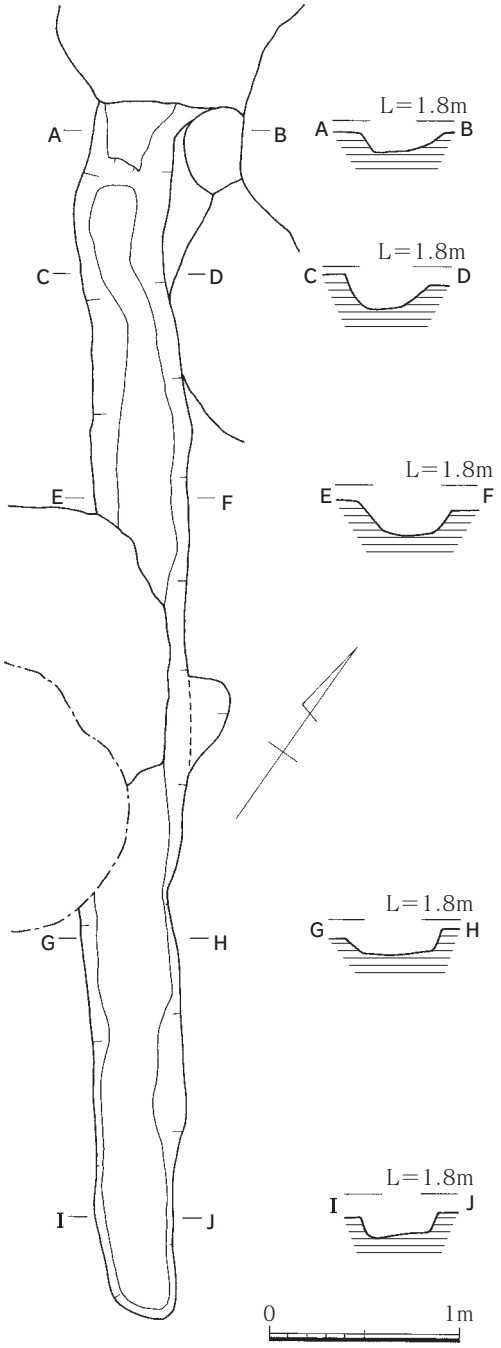


Fig.11　SD-108(1/40)

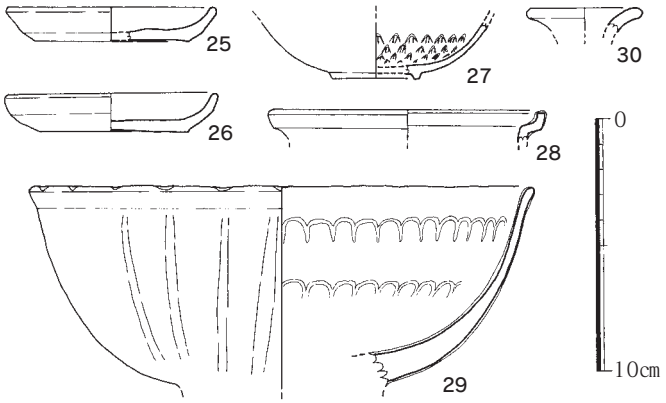


Fig.12　SD-108出土遺物(1/3)

SD－108出土遺物　Fig.12

土師器小皿・坏（糸）、古代須恵器、瓦質・土師質土器、国産陶磁器（瀬戸）、中国産陶磁器（宋～元代白磁、同安窯系青磁、南宋～明代竜泉窯系青磁、陶器）、石製品が少量出土した。

25は土師器小皿で、口径8.2㎝、器高1.4cm。**26**も土師器小皿で、完品。口径8.4㎝、器高1.5cm。

27は白磁碗である。全体的に薄作りで、高台も極めて小さい。内面に陽印刻文を施す。胎土は非常に精良で、やや黄味がかった透明釉を全面にかけ、高台畳付は釉剝ぎする。**28・29**は竜泉窯系青磁である。28は小片だが盤口壷であろう。29は大形の輪花口縁碗で、内面に陽印刻文を、外面にヘラ彫りによる蓮弁文を不鮮明に施す。

30は灰釉瓶の小片である。素地は微細な黒色粒を含み硬陶質で、淡灰色の透明釉をかける。古瀬戸の小瓶とみられる。

14世紀中頃以前の遺物が主体を占めるが、明代の遺物が混じっており、またSD-108が後述の井戸SE-111（15世紀後半～16世紀前半）を切っていることから、16世紀代の遺構と考えられる。

(4) 井戸

井戸は計8基検出した。うち、近代まで使用されたとみられる4基を除き、報告する。

SE－015　Fig.13、PL.4

第1面のE～W-4グリッドに検出した。遺構覆土が周辺地山と近似するため、第2面で平面プランを正確に把握した。掘り方の平面形は隅丸方形で、北側に段が付くが、誤って別の遺構を同時に掘り下げた可能性がある。従って長径は3.8mほど、短径は西側が近世の瓦井戸に切られているが、3m前後となろう。標高1.1～1.2mのあたりで一旦平坦面を造り、2.1m×1.7mの隅丸方形の坑を掘って井戸

側を組んでいる。井戸側は桶で、5段まで積まれていることを確認したが、著しい湧水のため壁面が崩壊し、基底面を確認することはできなかった。桶は径68～70㎝、高さ20～25㎝で、責め具痕跡は確認できなかった。標高0.7m強で地山が細砂から粗砂へ変わるが、調査中雨天が多かったこともあって、粗砂層から著しい湧水があった。

SE－015出土遺物　Fig.14、PL.10

土師器小皿・坏（糸）、古代・中世須恵器、瓦器（楠葉型）、瓦質・土師質土器、国産陶磁器（備前、瀬戸・美濃）、中国産陶磁器（宋～明代白磁、青白磁、同安窯系青磁、南宋～明代竜泉窯系青磁、明代青花、陶器）、高麗～朝鮮王朝陶磁器、瓦、土製品、石製品、鉄滓、フイゴ羽口が出土した。量的にも多く、コンテナ5箱にのぼる。

31～34は土師器小皿で、未図化分を含め口径6.0～8.0cm、器高1.2～1.8cmの範囲にある。小形で器高の高いものが目立つ。**35・36**は土師器坏で、未図化分を含め口径10.2～10.6cm、器高2.0cmの範囲にある。

37は明代竜泉窯系青磁稜花腰折れ皿である。**38**は白磁皿で、内底は露胎とする。**39・40**は明代青花皿である。

41は高麗末～朝鮮王朝転換期の象嵌青磁碗である。高台畳付を釉剥ぎし、外底にはヘラ先による調整痕がある。**42～46**は朝鮮王朝陶磁である。42は刷毛粉青碗で、高台畳付けを釉剥ぎし、内底には目痕がある。43は印花粉青皿である。畳付けから高台内は露胎とする。内底中央に官庁名を示す銘を入れた「礼賓手」と称されるものである。白化粧土はきれいにふきとらずに刷毛の痕跡をそのまま残す。44は軟質白磁碗である。高台内はアーチ状を呈し、全釉で高台畳付と内底に4ヶ所砂目が付く。

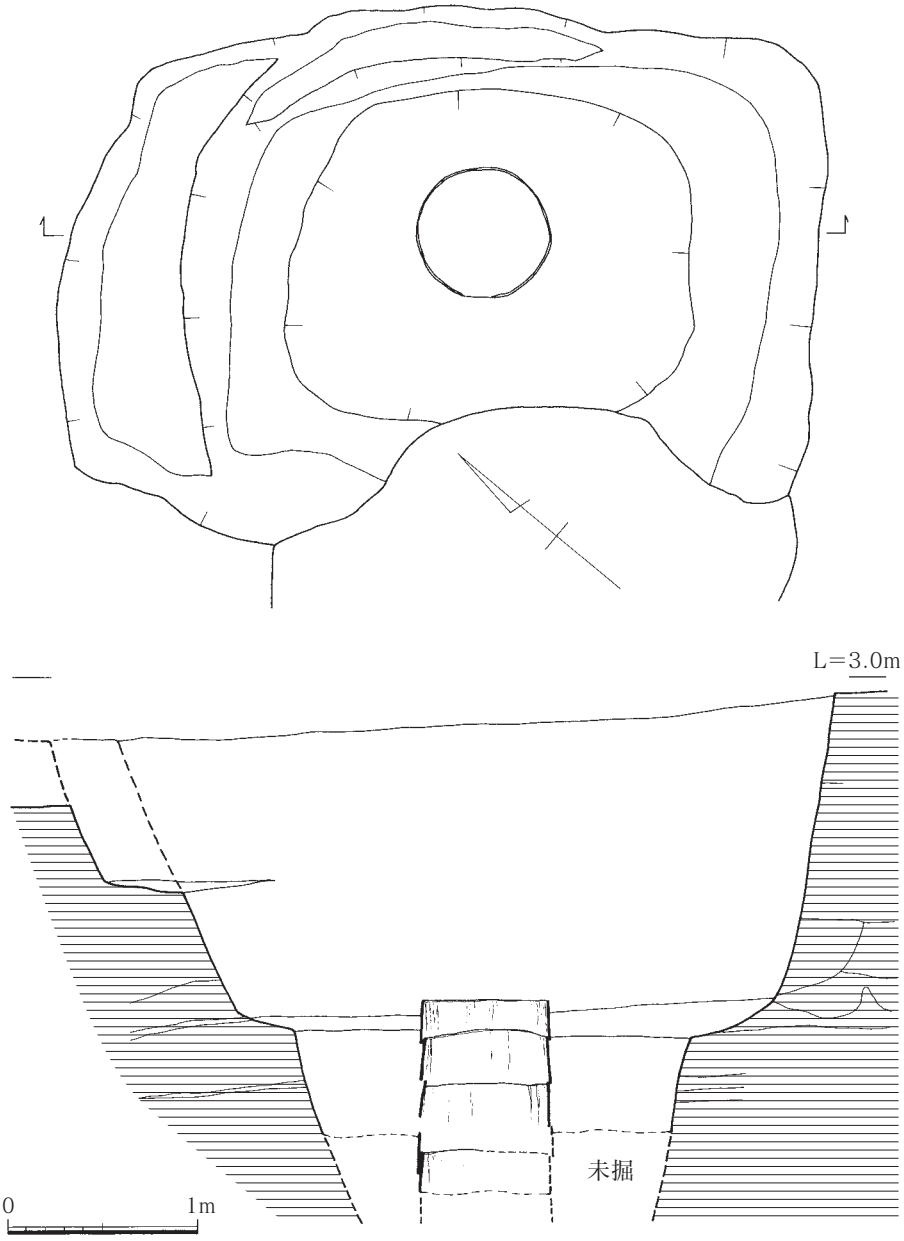


Fig.13　SE-015(1/40)

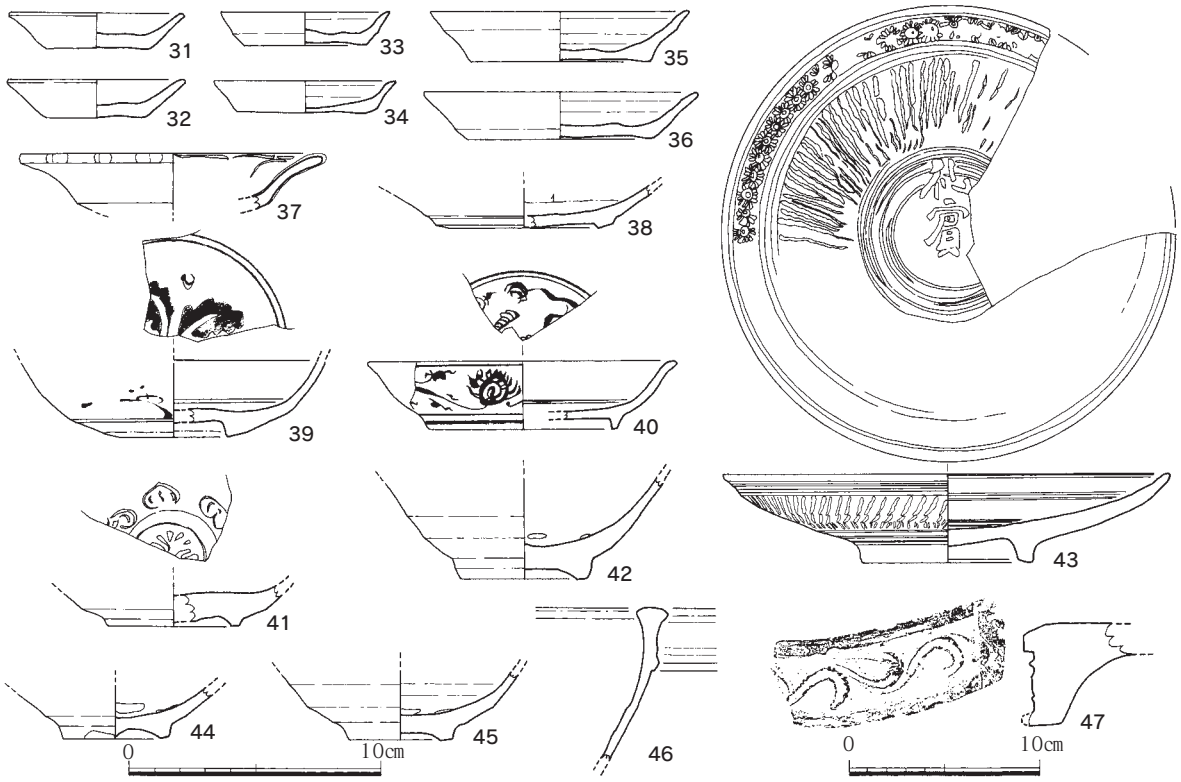


Fig.14　SE-015出土遺物（47は1/4、他は1/3）

45は灰青陶器碗で、全釉で高台畳付と内底に5ヶ所砂目が付く。46は黒茶色釉陶器の鉢で、口縁上面を釉剝ぎする。

47は軒平瓦で、瓦当内区に均整唐草文を配する。燻しにより黒色を呈する。

以上の遺物の他、竜泉窯系青磁、青白磁をその他の出土遺物の項に掲載した。

出土遺物より遺構の時期は16世紀後半～末と考える。

SE－020　Fig.15、PL.4

第1面のE-3グリッドに位置する。周囲の遺構を切っており、残りも良い。平面形は円形を呈し、径1.1mを測る。円筒状に掘り下げており、壁面の崩壊はほとんどない。遺構検出面から2.3m掘り下げたところで井戸側の痕跡を確認し、更に0.3m掘り下げたところで湧水のため掘削不可能となった。井戸側は桶とみられる。湧水レベルは先のSE-015に等しく、標高0.5m前後である。

SE－020出土遺物　Fig.16

土師器小皿・坏（糸）、古代須恵器、瓦器、瓦質・土師質土器、国産陶磁器（備前、肥前系）、中国産陶磁器（宋～明代白磁、青白磁、同安窯系青磁、南宋・明代竜泉窯系青磁、景徳鎮青磁、明代青花、陶器）、高麗～朝鮮王朝陶磁、瓦、石製品、鉄滓がコンテナ4箱出土した。

48・49は土師器小皿で、48は口径6.0㎝、器高1.3cm、49は口径6.0㎝、器高1.2cm。ともに口縁端部に油煙が付着する。**50**は土師器坏で、口径13.0㎝、器高3.9cm。外底にナデの痕が残る。**51**は焼塩壷で、内面に布目痕が付く。

52は明代漳州窯青花皿である。**53**は朝鮮王朝の硬質白磁碗である。高台畳付と内底に胎土目が付く。

54は備前焼壷で、外面に自然釉がかかる。**55**は唐津焼褐釉すり鉢、**56**も同じく唐津焼黄釉碗とみられ、内・外底に砂粒が付着する。

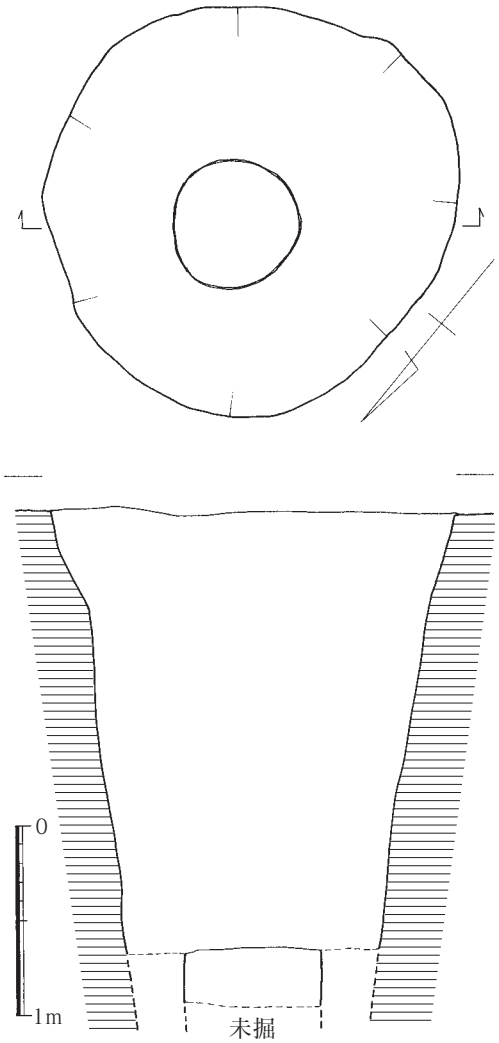


Fig.15　SE-020(1/40)

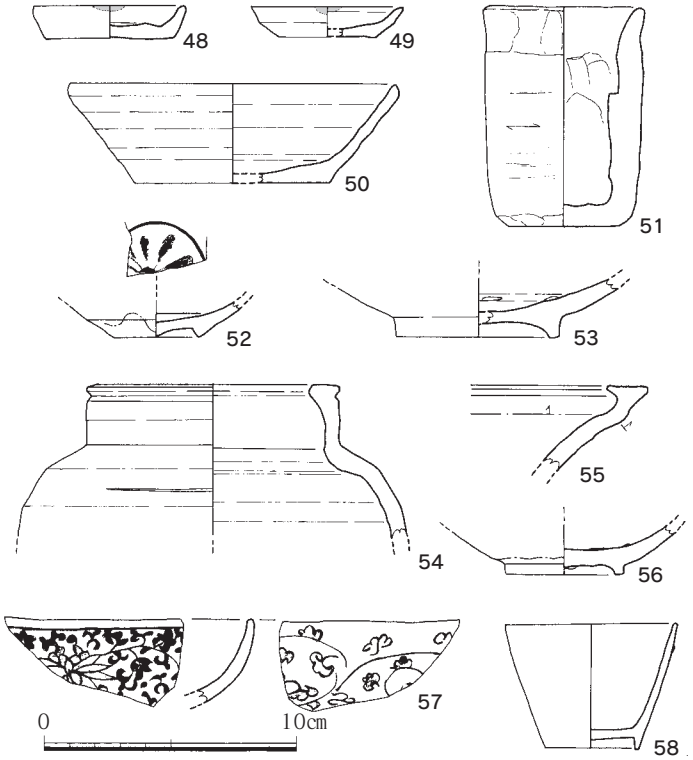


Fig.16　SE-020出土遺物(1/3)

57は肥前磁器の染付角皿、**58**は同じく白磁坏。

以上の他、墨書磁器、白磁、竜泉窯系青磁、明代青花は、その他の出土遺物の項に掲載した。

近世陶磁器が出土しており、18世紀代の井戸であろう。

SE−075　Fig.17、PL.5

第2面のE〜W-2〜3グリッドに位置する。重複するSK-070はSE-075井戸側上部に生じた窪みと考えられる。東側をSE-020に切られており、南東側に取り付く浅い段は別の土坑であろう。掘り方の平面プランは楕円形で、長径3.7m、短径2.7m。断面すり鉢状を呈するが、掘り方下部は湧水のため崩壊し調査不可能である。井戸側には模式図に示すように板材を井桁状に方形に組み合わせたものを重ねており、計8段を確認した。各段は20㎝前後の高さで、ホゾ孔で固定しており、段間にずれが生じないよう一部外側から板を当てて補強している。底面は湧水のため下端を確認したのみで、取り上げた板材から断面図を作成した。板材の樹種はクロマツである。井戸側内部には1.7m以上の長さの杭が差し込まれていたが、祭祀に関わるものであろうか。

SE−075出土遺物　Fig.18、PL.10

土師器小皿・坏（糸）、古代・中世須恵器、瓦器（楠葉）、瓦質・土師質土器、国産陶磁器（備前）、中国産陶磁器（宋〜明代白磁、青白磁、同安窯系青磁、南宋・明代竜泉窯系青磁、明代青花、陶器）、朝鮮王朝陶磁、瓦、土製品、石製品、鉄滓、フイゴ羽口がコンテナ3箱出土した。

59〜**61**は土師器小皿で、口径・器高はそれぞれ、7.0cm・1.7cm、7.2 cm・1.5cm、7.6cm・1.4cm。**62**・**63**は土師器坏で、62は口径10.7㎝、器高2.5cm、63は口径11.2㎝、器高2.3cm。

64は瓦質土器足鍋の小片、**65**は同じくすり鉢で両側に口が付く。**66**は備前焼すり鉢でⅣB期に位

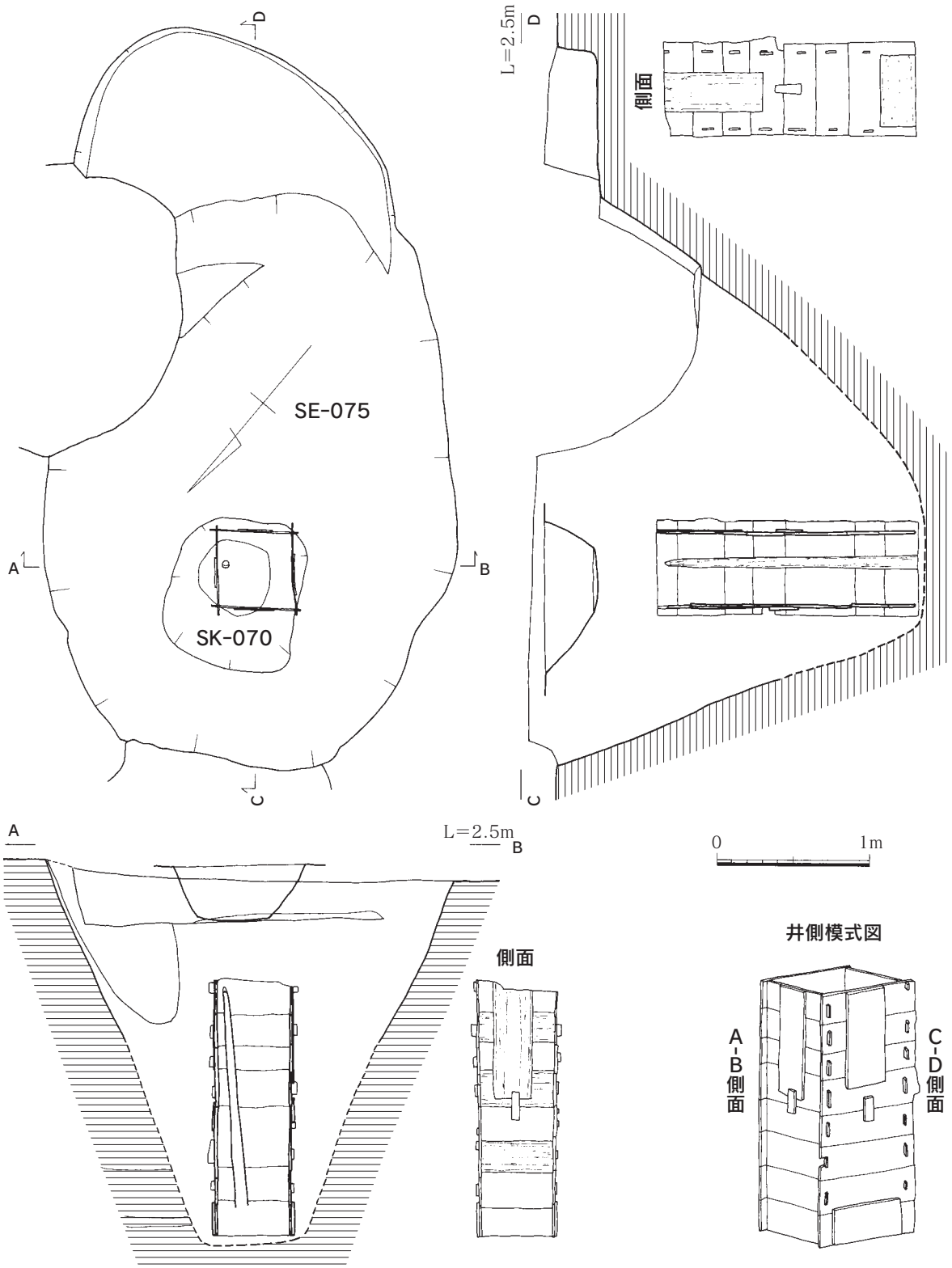


Fig.17　SE-075(1/40)

置づけられる。

67～**69**は邵武窯明代白磁で、いずれも外底に墨書がある。67は皿、68は八角坏、69は皿で内底に印花文を施す。**70**は朝鮮王朝陶磁の軟質白磁碗である。高台内はアーチ状を呈する。全釉で高台畳

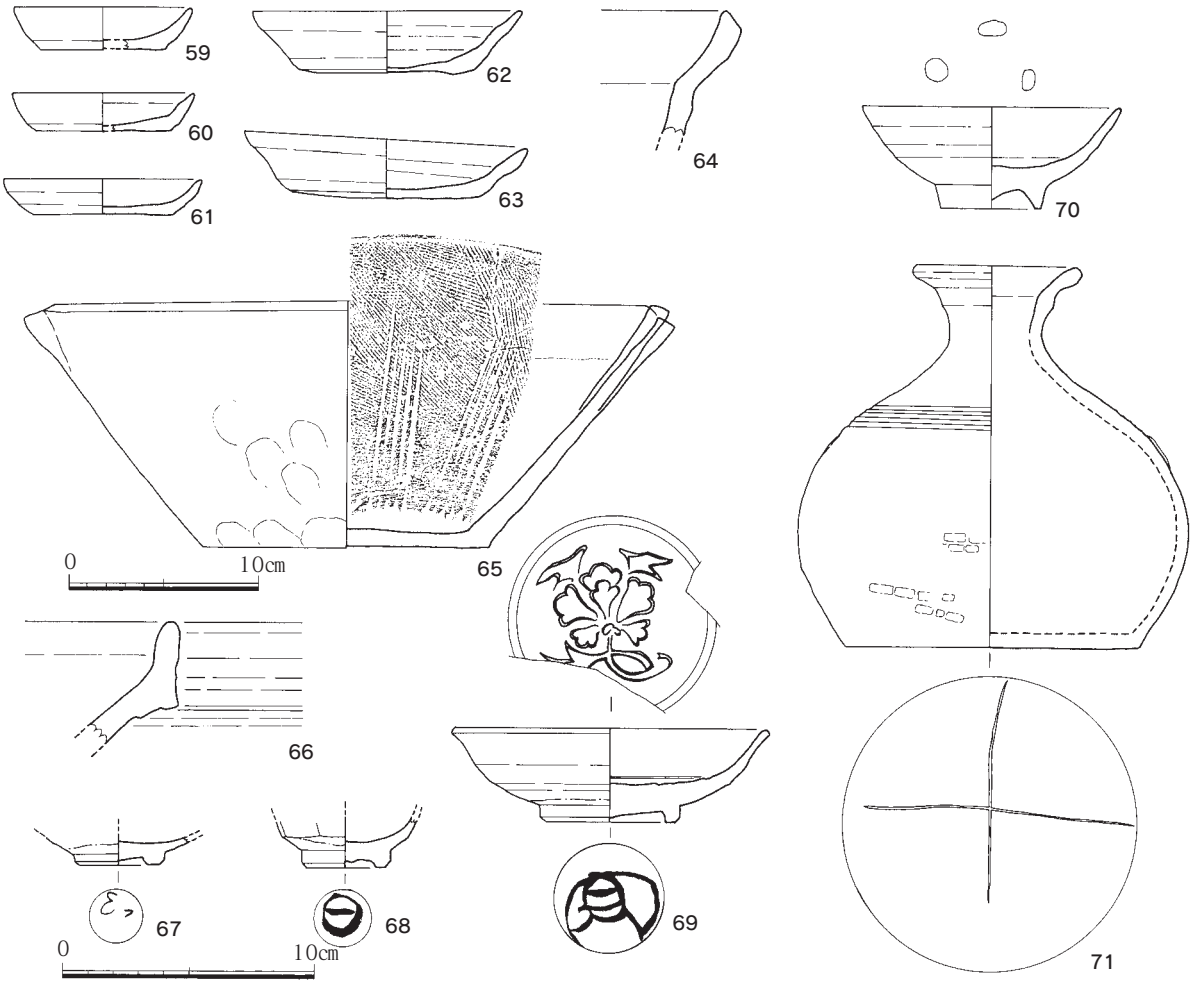


Fig.18　SE-075出土遺物（65は1/4、他は1/3）

付を釉剝ぎ、内底には砂目が付く。**71**も朝鮮王朝陶磁で、暗緑灰色釉陶器の瓶である。タタキ成形の後、横ナデ調整を施し、肩部に5条の沈圏線を巡らす。外底に施釉後に「十」の窯記号を刻む。完形品で口径6.7㎝、器高15.0㎝、底径11.7cmを測る。井戸側上層のSK-070より出土した。

以上の他、天目、瓦玉、土錘はその他の出土遺物の項に掲載した。

16世紀後半代の井戸とみられる。

SE－080　Fig.19、PL.6

第2面のE～W-5グリッドに検出した。覆土は黒褐色粘質土で、周辺の地山と酷似しており、第3面で正確な平面プランを確認した。掘り方の1/3ほどが調査区外にあるが、円形ないし楕円形プランとみられる。段状に掘り下げ、標高0.8mに平坦面をつくり、南側に寄せて径1.1～1.25mの楕円形坑を掘り、井戸側を置いている。井戸側は桶で、上半は高25㎝ほどの桶を3段積み重ね、下半は高80㎝の深い桶を使用している。上半には責め具痕は認められないが、下半の桶では3段の責め具痕跡が認められた。底面は標高0mにあるが、湧水のため桶の下端を一部確認したに留まり、断面図は復元図として示した。桶は腐食が著しく、取り上げることは不可能であった。

SE－080出土遺物　Fig.20

土師器小皿・坏（ヘラ・糸）、古代須恵器、瓦器、瓦質・土師質土器、国産陶磁器（備前）、中国産陶磁器（宋～明代白磁、青白磁、同安窯系青磁、南宋～明代竜泉窯系青磁、明代青花、陶器）、高麗～

朝鮮王朝陶磁、瓦、石製品、鉄滓、フイゴ羽口がコンテナ4箱出土した。

72～**74**は土師器小皿で、全て底部糸切りである。口径・器高は、順に7.2㎝・1.9cm、7.4㎝・1.7cm、7.4㎝・1.7cmを測る。**75**は備前焼すり鉢でⅣB期であろう。

76・**77**は明代龍泉窯系青磁碗である。76は高台内が露胎で、77は高台内の途中まで釉がかかる。**78**は明代邵武窯白磁皿で外底に墨書がある。**79**は白磁皿で、内底を釉剥ぎする。**80**は明代白磁端反り皿で、外底に染付により銘款を入れる。**81**は高麗青磁瓶である。**82**は朝鮮王朝陶磁の緑褐色釉陶器の瓶である。**83**も朝鮮王朝陶磁で、刷毛粉青皿。全釉で内底に目痕が付く。**84**は白磁碗であるが、焼成不足により全く発色していない。朝鮮王朝陶磁とみられる。

以上に図示した遺物の他、青白磁、天目、墨書陶磁器は別項にまとめた。

16世紀代の井戸であろう。

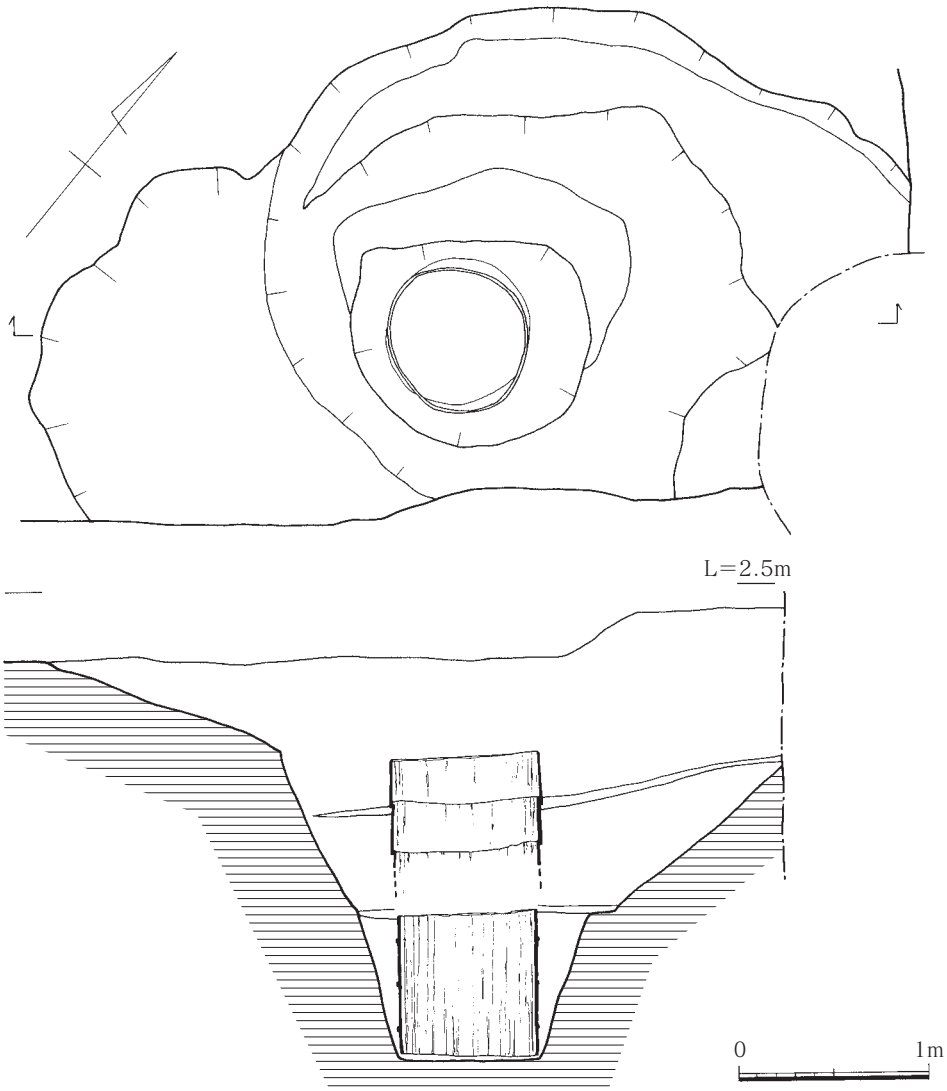


Fig.19　SE-080(1/40)

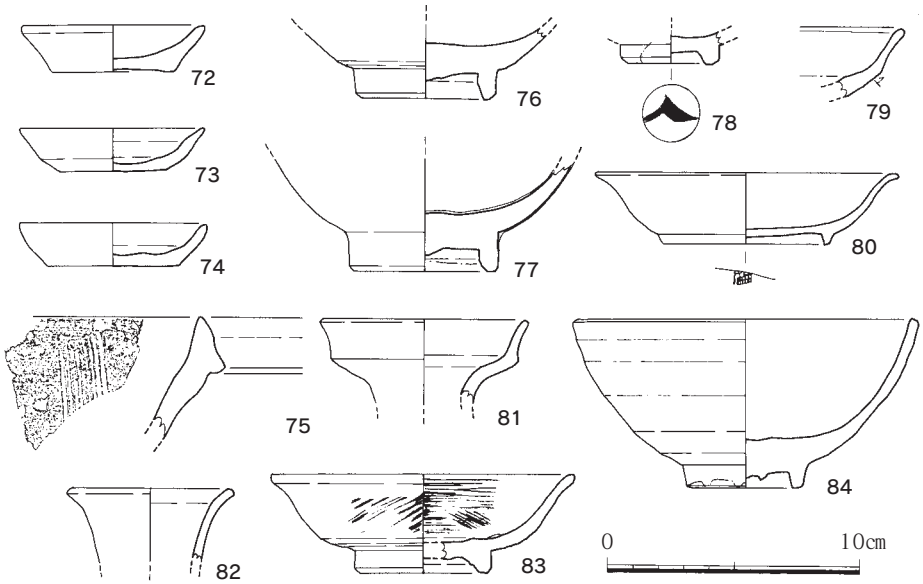


Fig.20　SE-080出土遺物(1/3)

SE－111　Fig.21、PL.6

第3面のE～W-3グリッドに位置する。第3面下層の自然堆積層を対象として設けたトレンチ3に井戸側が現れたため、周辺を精査して井戸であることを確認した。覆土は黒色砂質土で、周辺地山土に酷似しており検出が困難である。SE-075、近世井戸SE-050、溝SD-108等に切られており、断片的ではあるが掘り方は隅丸方形を呈すると考えられ、径2.5m×2.8mほどの規模となろう。断面形はすり鉢状をなすが、底部は湧水により壁面の細砂が流れ出し、実測不可能であった。井戸側は桶で、径50㎝を測るが、土圧により南西側は崩壊している。桶は幅6～8㎝、長さ85㎝の細長い板材を組み合わせているが、責め具痕は確認できなかった。材の樹種同定を行っていないが、スギと思われる。底面のレベルは標高0mで、他の中世井戸に等しい。湧水が著しいため桶の下端のみを確認し、トレンチ3の土層図と合成して断面図を作成した。

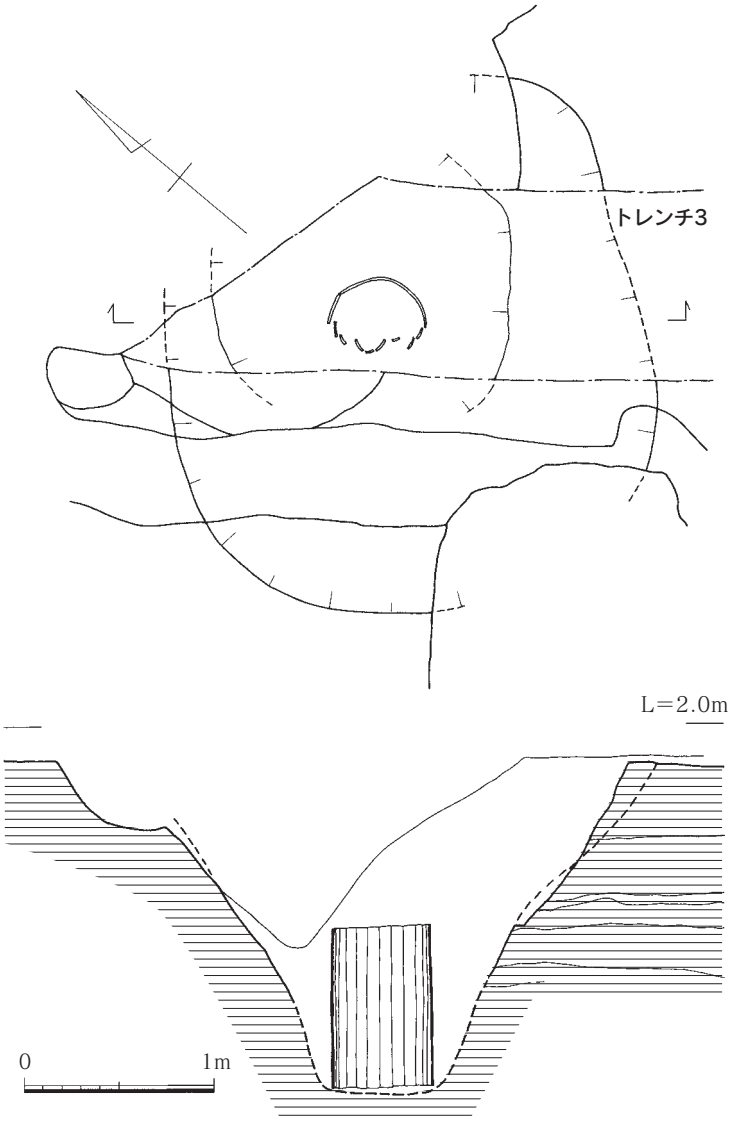


Fig.21　SE-111(1/40)

SE－111出土遺物　Fig.22、PL.10

土師器小皿（糸）、古代須恵器、瓦質・土師質土器、中国産陶磁器（宋代白磁、青白磁、南宋・明代竜泉窯系青磁、明代青花、陶器）、朝鮮王朝陶磁、石製品が少量出土した。

85は土師器小皿で、底部糸切りである。口径8.2cm、器高1.5cmを測る。

86は明代龍泉窯系青磁盤である。外面に幅広の蓮弁文を施し、外底を輪状に釉剝ぎする。内底にも印花文らしき文様が認められるが不鮮明である。**87**は明代青花皿である。外面と内底の文様は雲龍文で、龍は5本爪を持つ。**89**は印花粉青瓶である。外面は全釉で高台畳付を釉剝ぎ、内面は頸部まで釉がかかる。印花文を施した後、塗った白土をきれいに拭きとっていない。SE-015・111、SF-030、SK-044・071から出土した破片が接合し、最も時期の古いSE-111に本来含まれたと考える。

88は瓦質土器火鉢である。内面は刷毛目調整、外面はミガキを施す。口縁と胴の外面に突帯2条を回し、印花文を充填する。

以上の出土遺物より、15世紀後半～16世紀前半の井戸と考えられよう。

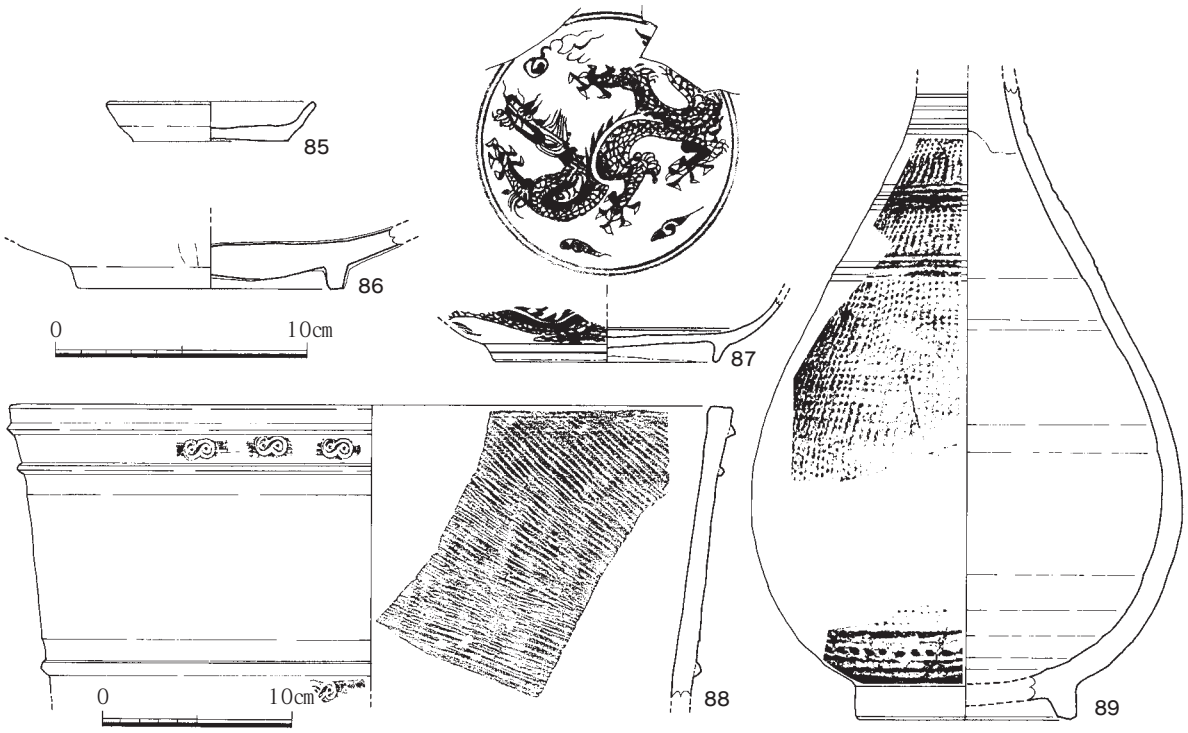


Fig.22　SE-111出土遺物（88は1/4、他は1/3）

(5) 石組み土坑

SK－005　Fig.23、PL.7

第1面のW-5グリッドに検出した。調査に先行して打たれたコンクリート基礎杭により1/2弱が破壊されている。掘り方は隅丸方形プランを呈し、北東側に取り付く浅い段は別の遺構か。現状で径2.3m以上、深さ0.7m。掘り方の壁面に沿って石を積み上げ、内側の礫の面を揃えている。石積みは角礫を用いて3～4段に行っており、底面は地山土である黒

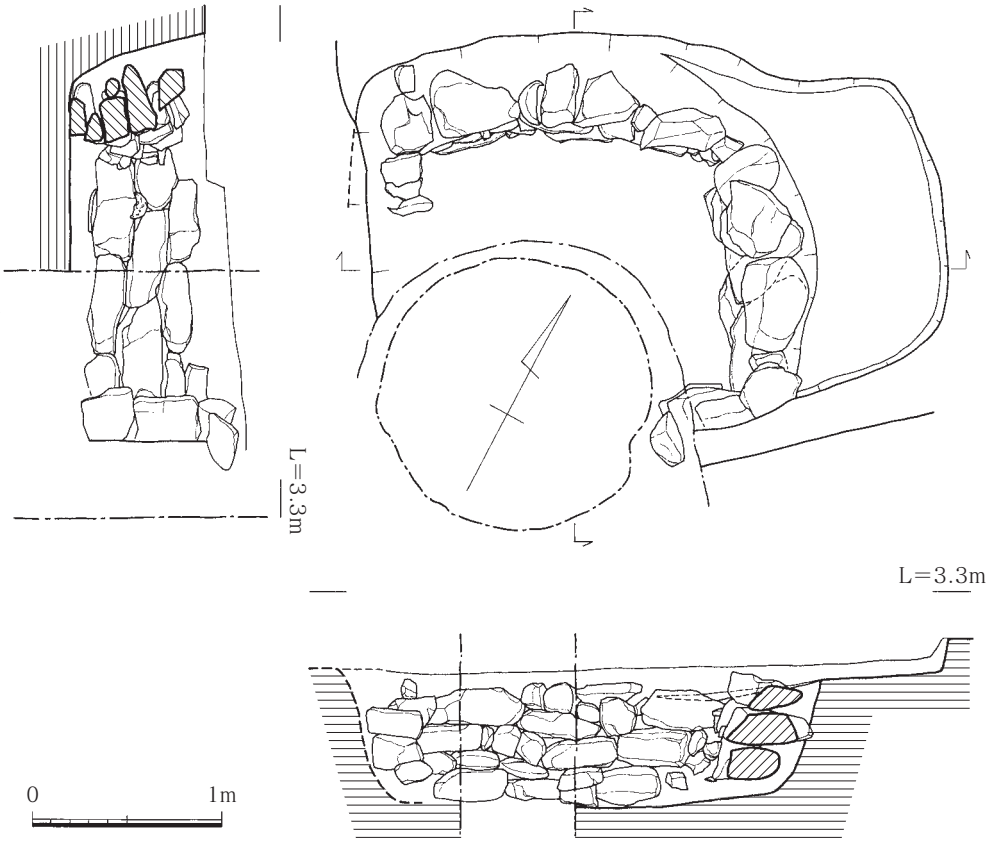


Fig.23　SK-005（1/40）

色粘質土が露呈する。

SK－005出土遺物

Fig.24

土師器小皿・坏(糸)、古代須恵器、瓦質・土師質土器、国産陶磁器(備前、肥前系)、中国産陶磁器(宋代白磁、南宋～明代竜泉窯系青磁、陶器)、瓦、土製品、石製品が少量出土した。

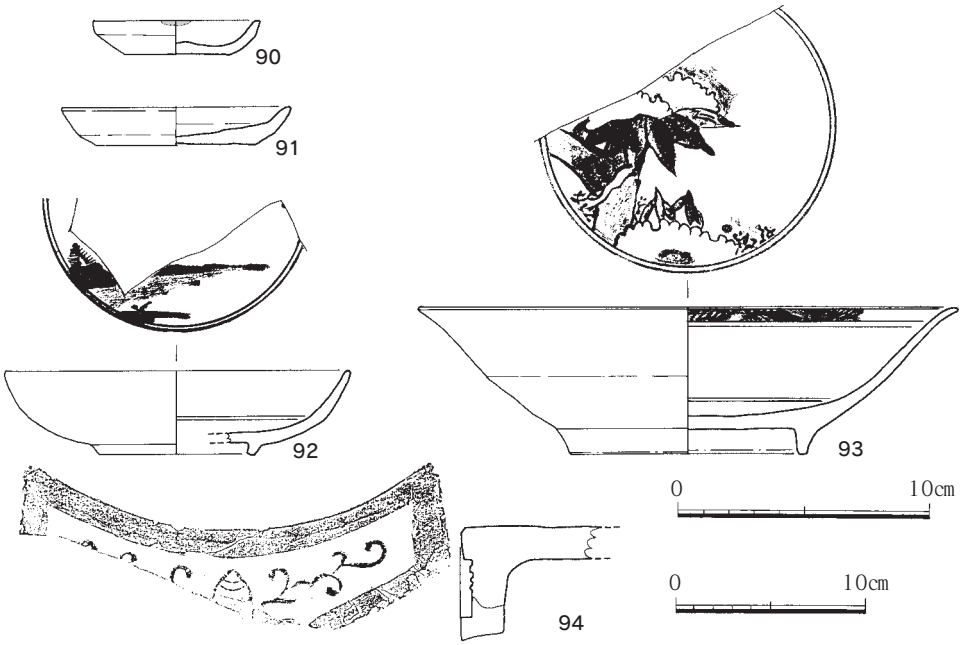


Fig.24　SK-005出土遺物(94は1/4、他は1/3)

90は土師器小皿で、口縁に油煙が付着する。口径6.6cm、器高1.3cm。**91**は土師器坏で、口径9.0cm、器高1.5cmを測る。**92・93**は肥前系陶磁器の染付皿である。

94は軒平瓦で、内区に均整唐草文を配し、中心飾りは宝珠形をなす。段顎で、燻して黒色とする。

17世紀には廃絶し埋められた遺構であるが、築造は中世後期にさかのぼる可能性があろう。

SK－023　Fig.25、PL.7

第1面のE-3グリッドに検出した。SK-005同様、主要部分にコンクリート基礎杭が当たり大きく破壊されており、南東コーナー付近の礫のみが原位置を留めている。掘り方は隅丸方形で、径1.8m前後、深さは40cmである。掘り方の壁面に沿うように角礫を積み上げたとみられ、残りの良い部分では2段が積まれており、内側の面が揃っている。

土師器小皿・坏(糸)、瓦質土器、中国産陶磁器(宋代白磁、明代竜泉窯系青磁、陶器)、朝鮮王朝陶磁が少量出土したが、図化できる遺物はない。

近世の遺物は出土していない。時期不詳だが、中世後期の遺構と考えられよう。

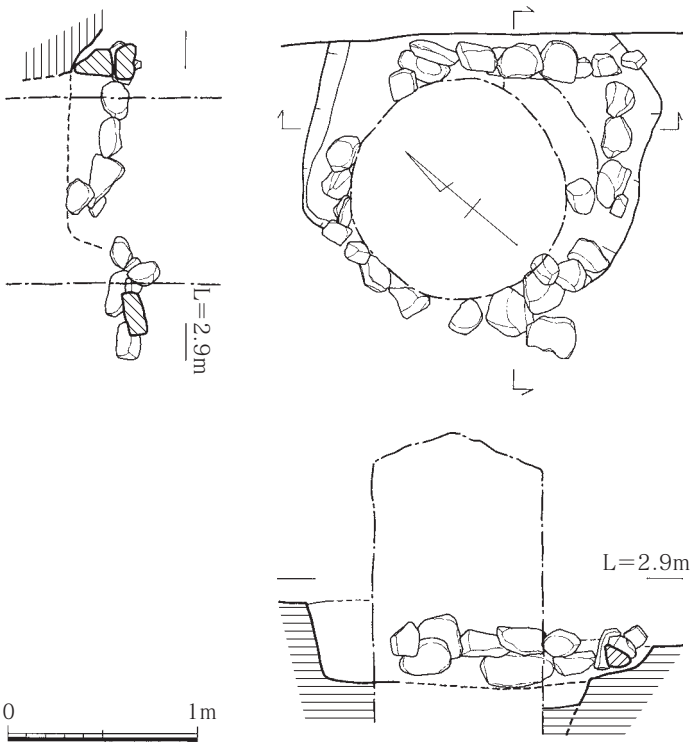


Fig.25　SK-023(1/40)

(6) 土坑

SK－002　Fig.26、PL.8

第1面のE-5グリッドに検出した。攪乱坑に一部を切られる。平面形は不整な隅丸方形で、径2.5m。断面すり鉢状に窪み、深さ1.2mである。底面から径40㎝までの大小の円～角礫が出土した。

SK－002出土遺物　Fig.27

土師器小皿・坏(糸)、古代・中世須恵器、瓦質・土師質土器、国産陶磁器(備前、肥前系)、中国産陶磁器(宋・明代白磁、青白磁、同安窯系青磁、南宋・明代竜泉窯系青磁、明代青花、陶器)、朝鮮王朝陶磁、瓦、石製品、鉄滓、フイゴ羽口がコンテナ3箱出土した。

95・96は土師器小皿である。未図化分も含め口径6.4～7.6cm、器高1.2～1.4cmである。95は口縁に油煙が付着する。**97**は土師器坏で、口径9.8㎝、器高2.0cm。**98**は白磁皿である。内外底には釉がかからず露胎とする。**99**は緑釉陶器の壷で、玉縁口縁。磁竈窯か。**100**は唐津焼灰釉皿である。

近世の土坑である。

SK－016　Fig.26

第1面のW-3～4グリッドに位置する。他の遺構との切り合いはない。平面プランは不整な円形で、径1.03～1.15m。断面皿状に窪み、深さ0.2mと浅い。

SK－016出土遺物　Fig.27

土師器小皿・坏(糸)、瓦質土器、国産陶磁器(備前)、中国産陶磁器(宋・元代白磁、南宋代竜泉窯系青磁、明代青花、陶器)、朝鮮王朝陶磁、瓦が少量出土した。

101～103は土師器小皿で、口径・器高は順に7.2㎝・1.7cm、7.4㎝・1.9cm、8.2㎝・2.0cmである。**104**は暗茶黄色釉陶器の甕である。内面には半月形の当て具痕が残る。

出土遺物が少なく不明確であるが、16世紀後半頃の土坑であろう。

SK－043　Fig.26

第1面のE～W-3グリッドに検出した。井戸SE-020に切られる。不整な楕円形プランで、長径1.2m以上、短径1.0m。断面形は逆台形で、深さ0.3m。底面は平坦である。

SK－043出土遺物　Fig.26

土師器小皿(糸)、古代須恵器、瓦質・土師質土器、国産陶磁器、中国産陶磁器(宋・明代白磁、景徳鎮窯青磁、明代青花)、朝鮮王朝陶磁が少量出土した。

105は土師器だが、器種は不明である。きめ細かな土で硬く焼かれている。外面は二次加熱を受け、内面には炭化物が付着する。**106**は景徳鎮窯青磁菊皿である。高台内は白磁釉をかけ分ける。**107**は朝鮮王朝陶器の甕である。黒褐色釉が内面までかかる。肩部突帯以下に沈線を多条に巡らす。

16世紀後半の土坑であろう。

SK－044　Fig.26

第1面のE～W-3グリッドに位置し、SK-043同様SE-020に切られる。不整な隅丸長方形プランで、長径1.35m、短径0.9m以上。断面逆台形で深さ0.5m。底面は中央が窪む。

SK－044出土遺物　Fig.27、PL.10

土師器小皿・坏(糸)、瓦質・土師質土器、国産陶磁器(備前)、中国産陶磁器(明代白磁、南宋・明代

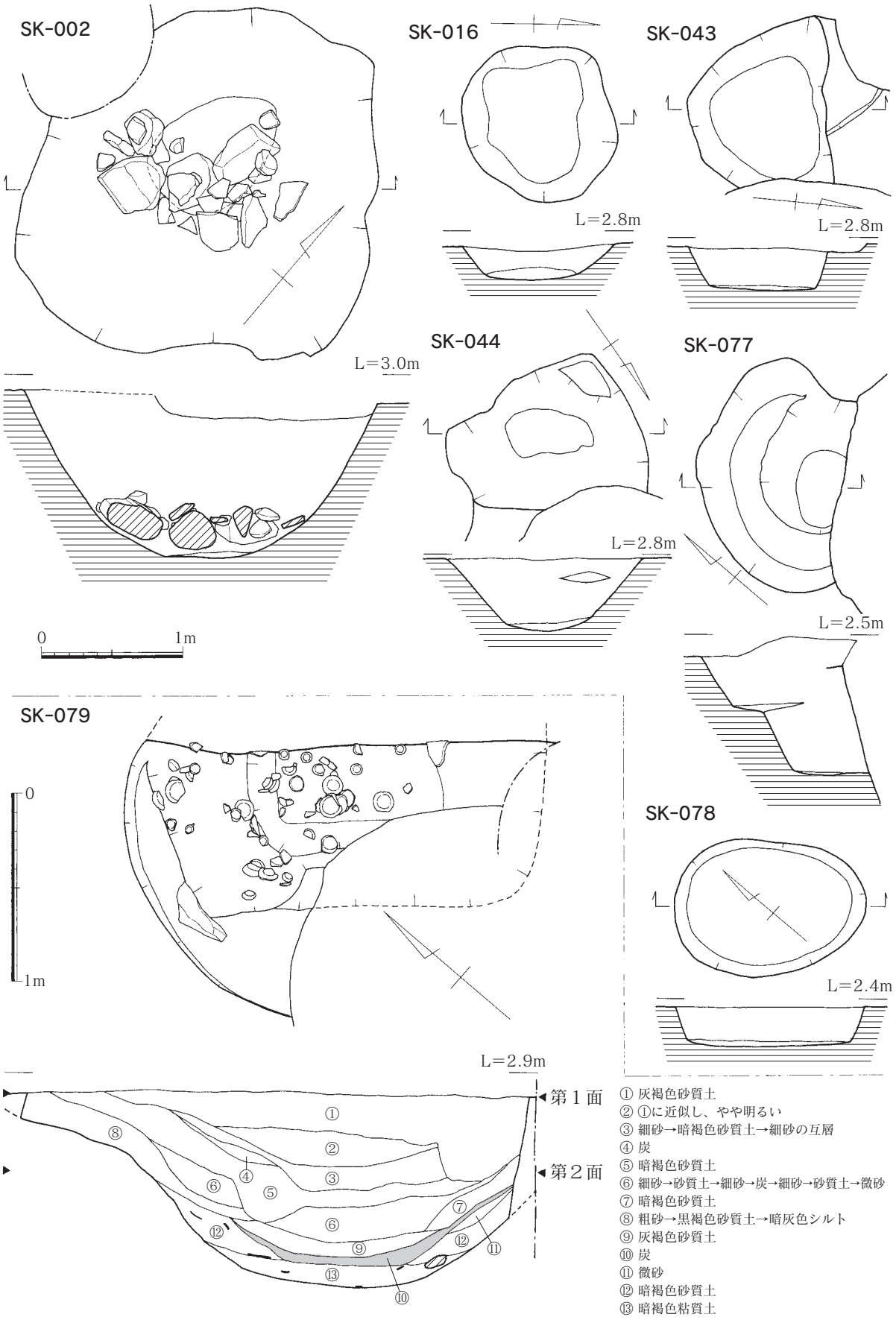


Fig.26　SK-002･016･043･044･077･078･079（SK-079のみ1/30、他は1/40）

竜泉窯系青磁、明代青花、陶器)、朝鮮王朝陶磁、瓦、鉄滓が少量出土した。

108～**110**は土師器小皿で、未図化分を含め口径5.8～6.8cm、器高1.2～1.5cm。**111**・**112**は土師器坏で、未図化分を含め口径9.4～10.8cm、器高1.7～2.4cm。**113**は土師質土器鍋である。内外面に刷毛目を施し、外面に煤が厚く付着する。**114**は瓦質土器のすり鉢で、内面が使用によりかなり摩滅する。スリ目は4本一組である。**115**は明代白磁皿である。**116**は明代龍泉窯系青磁碗で、外面の細蓮弁文は粗雑である。**117**は明代青花皿である。**118**は灰釉陶器の片口鉢である。外面上部に3条の沈線が巡る。白色の粗砂粒を多量に含む極めて粗い素地で、淡灰色の透明釉がかかる。

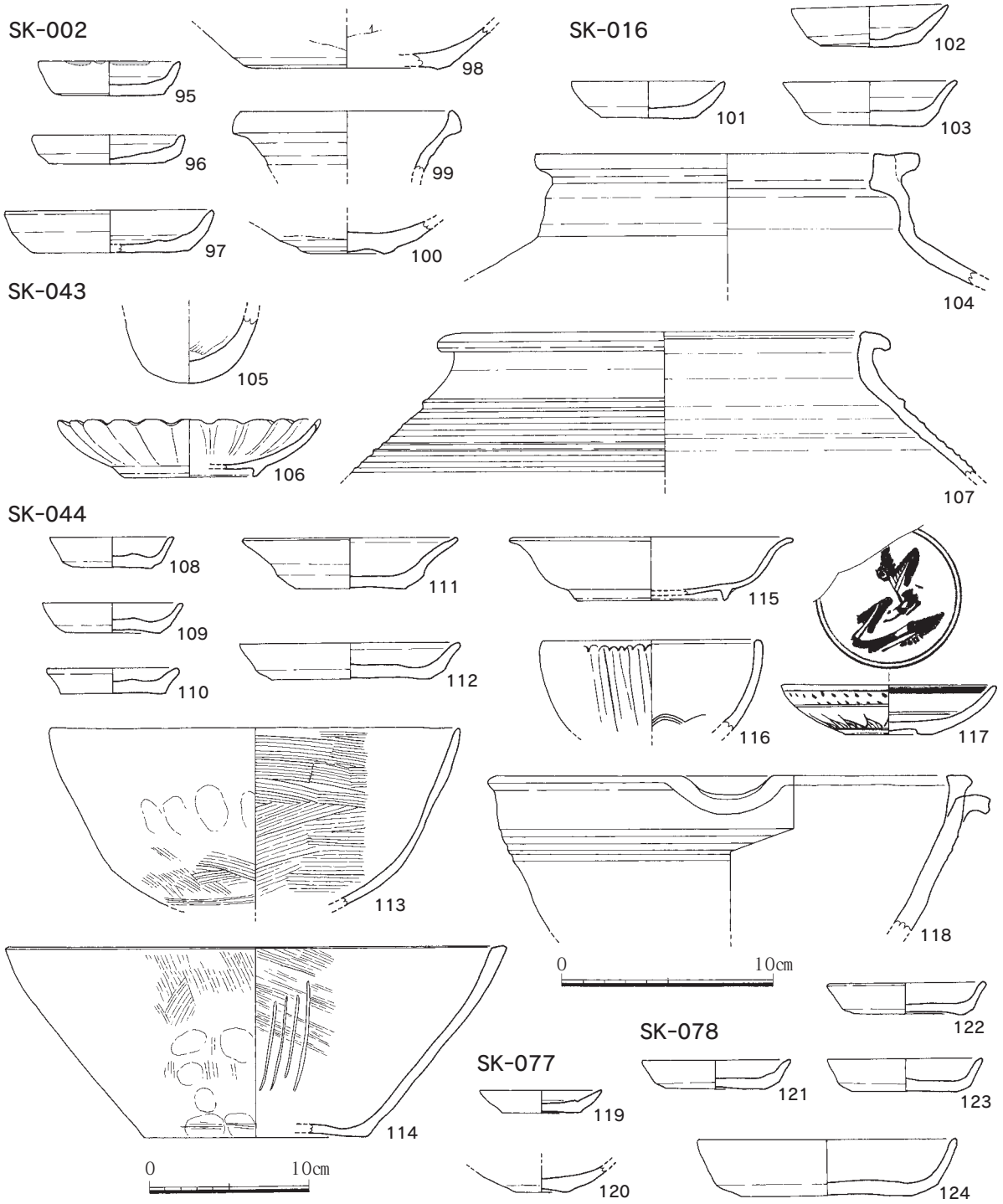


Fig.27　SK-002･016･043･044･077･078出土遺物(113･114は1/4､他は1/3)

16世紀の土坑と思われる。

SK－077　Fig.26、PL.8

第2面のE～W-2グリッドに検出した。井戸SE-075に切られる。不整円形プランで、長径1.65m、短径1.05m以上である。断面逆台形で壁の一部は段をなし、深さ0.9mである。

SK－077出土遺物　Fig.27

土師器小皿・坏(糸)、古代須恵器、瓦質・土師質土器、中国産陶磁器(宋・明代白磁、南宋代竜泉窯系青磁、陶器)が少量出土した。

119は土師器小皿で、底部糸切り。胎土は白色で精良である。口径5.8㎝、器高1.0cm。**120**は陶器皿である。淡灰白色硬陶質の素地に、白濁した灰白色の不透明釉がかかり、外底は露胎とする。

出土遺物が少なく詳細不明だが、16世紀頃の土坑であろう。

SK－078　Fig.26、PL.8

第2面のW-2グリッドに検出した。他の遺構とは切り合わない。平面プランは楕円形で、長径1.35m、短径0.95m。断面逆台形で、深さ0.3m、底面は平坦である。

SK－078出土遺物　Fig.27

土師器小皿・坏(糸)、瓦質・土師質土器、中国産陶磁器(明代竜泉窯系青磁、陶器)、朝鮮王朝陶磁が少量出土した。

121～123は土師器小皿で、未図化分を含めた法量は口径7.0～7.8cm、器高1.4～1.6cmである。**124**は土師器坏で、口径12.2㎝、器高2.6cm。

出土遺物が少なく詳細時期は不明。中世後期の遺構であろう。

SK－079　Fig.26、PL.8

第2面のE-2グリッドに位置し、近世瓦井戸SE-040に切られる。調査区壁にかかり、1/2弱は区外にあると考えられる。また調査に先行して打たれたコンクリート杭により上端の一部が調査不可能である。隅丸方形プランをとるとみられるが法量不明。土層断面より、第1面から掘り込まれた遺構であると考えられ、深さ1.0mである。断面はすり鉢状を呈する。下層には炭化物からなる層があり、主にこの下層から土師器小皿・坏を中心に遺物が多く出土した。

SK－079出土遺物　Fig.28

土師器小皿・坏(糸)、古代須恵器、瓦質・土師質土器、中国産陶磁器(宋～明代白磁、同安窯系青磁、南宋・明代竜泉窯系青磁、陶器)、朝鮮王朝陶磁、土製品、瓦がコンテナ2箱出土した。

125～133は土師器小皿で、未図化分を含めた20個体の平均法量は口径6.6㎝、器高1.5cmである。**134～139**は土師器坏で、未図化分を含めた26個体の平均法量は口径10.8㎝、器高2.4cmである。135・136・138・139のように体部に強い横ナデ痕が残るものがある。**140**は瓦質土器の足鍋である。外底に格子タタキ痕が残る。**141**は白磁枢府坏である。高台畳付から内側は露胎で、畳付には砂粒が付着する。内底には陽印刻文が施される。**142**・**143**は明代邵武窯白磁皿である。刳り高台で、内底には目痕がある。**144**は明代竜泉窯系青磁の碗で外面に細蓮弁文を施す。**145**も明代竜泉窯系青磁で、腰折れ皿。内面にヘラ彫りによる文様を施すが不明瞭である。**146**は朝鮮王朝の軟質白磁皿である。高台内はアーチ状を呈する。全釉で、内底に5ヶ所砂目が付く。瓦玉・土錘は、末尾の別項にまとめた。

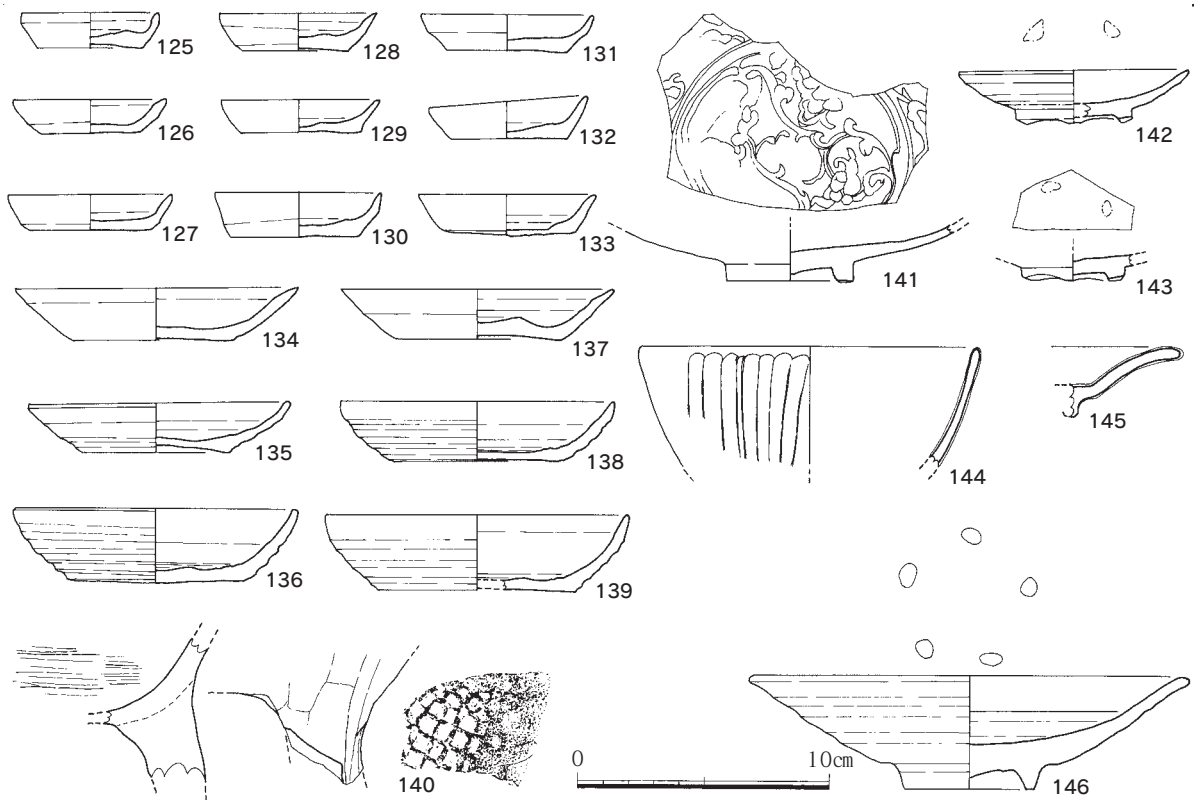


Fig.28　SK-079出土遺物(1/3)

16世紀後半代の土坑と考えられる。

SK－094　Fig.29、PL.9

第3面のE-3グリッドに検出した。溝状に細長い土坑で、北東部はコンクリート杭に破壊される。長さ2.0m、幅0.4m。深さは0.15mで浅く、西端部の底面より浮いて、少量の土師器がまとまって出土した。

SK－094出土遺物　Fig.30

土師器小皿・坏(糸)、瓦器、中世須恵器、瓦質・土師質土器、中国産陶磁器(宋～元代白磁、青白磁、同安窯系青磁、南宋代竜泉窯系青磁、陶器)が少量出土した。

147～149は土師器小皿で、148は口縁に油煙が付着する。未図化分を含めた法量は口径7.8～8.8cm、器高1.2～1.5cmである。**150・151**は土師器坏で、150は口径12.8㎝、器高2.6cm、151は口径11.8㎝、器高2.6cmである。**152**は東播系須恵器の鉢である。**153**は白磁口禿皿である。

14世紀前半頃の遺構とみられる。

SK－095　Fig.29、PL.9

第3面のE-3～4グリッドに検出した。楕円形プランを呈し、長径2.2m、短径1.15mを測る。断面は逆台形をなし、北側壁に段がある。底面は平坦で、中央部が浅く窪む。

SK－095出土遺物　Fig.30、PL.10

土師器小皿・坏(糸)、古代・中世須恵器、瓦質・土師質土器、国産陶磁器(備前)、中国産陶磁器(宋・明代白磁、青白磁、同安窯系青磁、南宋～明代竜泉窯系青磁、陶器)、高麗～朝鮮王朝陶磁、瓦、石製品、鉄滓、鞴羽口がコンテナ1箱出土した。

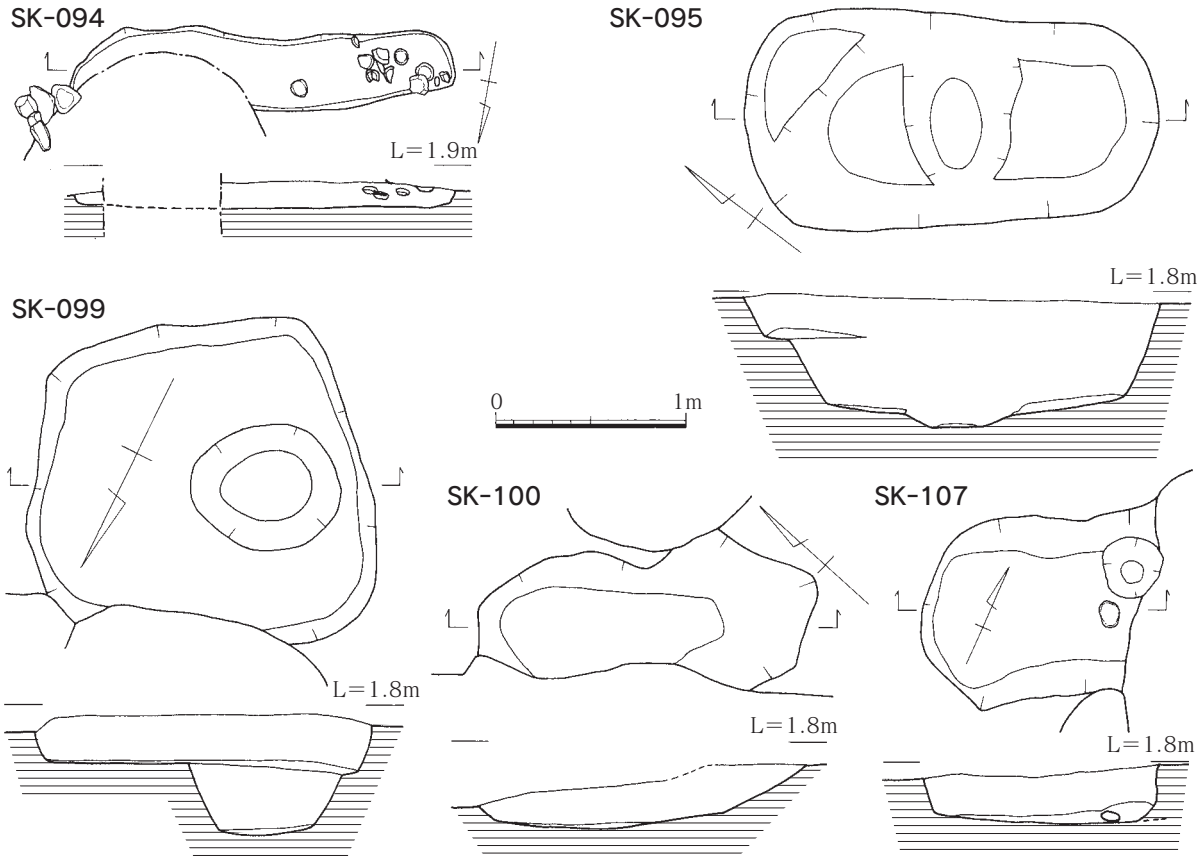


Fig.29　SK-094･095･099･100･107(1/40)

154～**157**は土師器小皿で、未図化分を含めた法量は口径6.6～8.2cm、器高1.2～1.7cmである。**158**～**161**は土師器坏で、未図化分を含めた法量は口径10.4～11.7cm、器高1.9～2.5cmである。159は油煙が付着する。**162**～**164**は瓦質土器である。162は浅鉢で全面に刷毛目調整を施す。163は羽釜である。偏球形の体部中央に鍔が巡り、下半には煤が付着する。肩部両側に外耳を付け、外耳を挟んで菊花文を1対ずつ、外耳と外耳の間には松文をスタンプする。164は捏ね鉢で、片口が付く。内面は使用により著しく摩滅する。**165**は備前焼すり鉢である。ⅣB期か。

166は白磁の鍔皿で口縁端部が赤変する。産地・年代は不詳。**167**は明代邵武窯白磁皿である。**168**は明代前半の竜泉窯系青磁口折皿である。内底に双魚印花文、外面に蓮弁文を施すが不鮮明である。外底は輪状に釉剝ぎし、墨書がある。**169**は高麗青磁碗である。高台畳付と内底に目土が付く。**170**は朝鮮王朝陶器の瓶である。内外面に暗緑茶色釉がかかる。

その他、瓦玉をその他の出土遺物の項に掲載した。

16世紀前半頃の土坑であろう。

SK－099　Fig.29、PL.9

第3面のW-4～5グリッドに検出した。近世の土坑SK-001に切られる。やや不整な隅丸方形プランで、径1.7～1.85m。断面逆台形で深さ0.2m。底面は平坦で、西よりに径0.65～0.8m、深さ0.4mのピットがある。

SK－099出土遺物　Fig.30

土師器小皿・坏(糸)、瓦器、古代・中世須恵器、瓦質・土師質土器、国産陶磁器(備前)、中国産陶

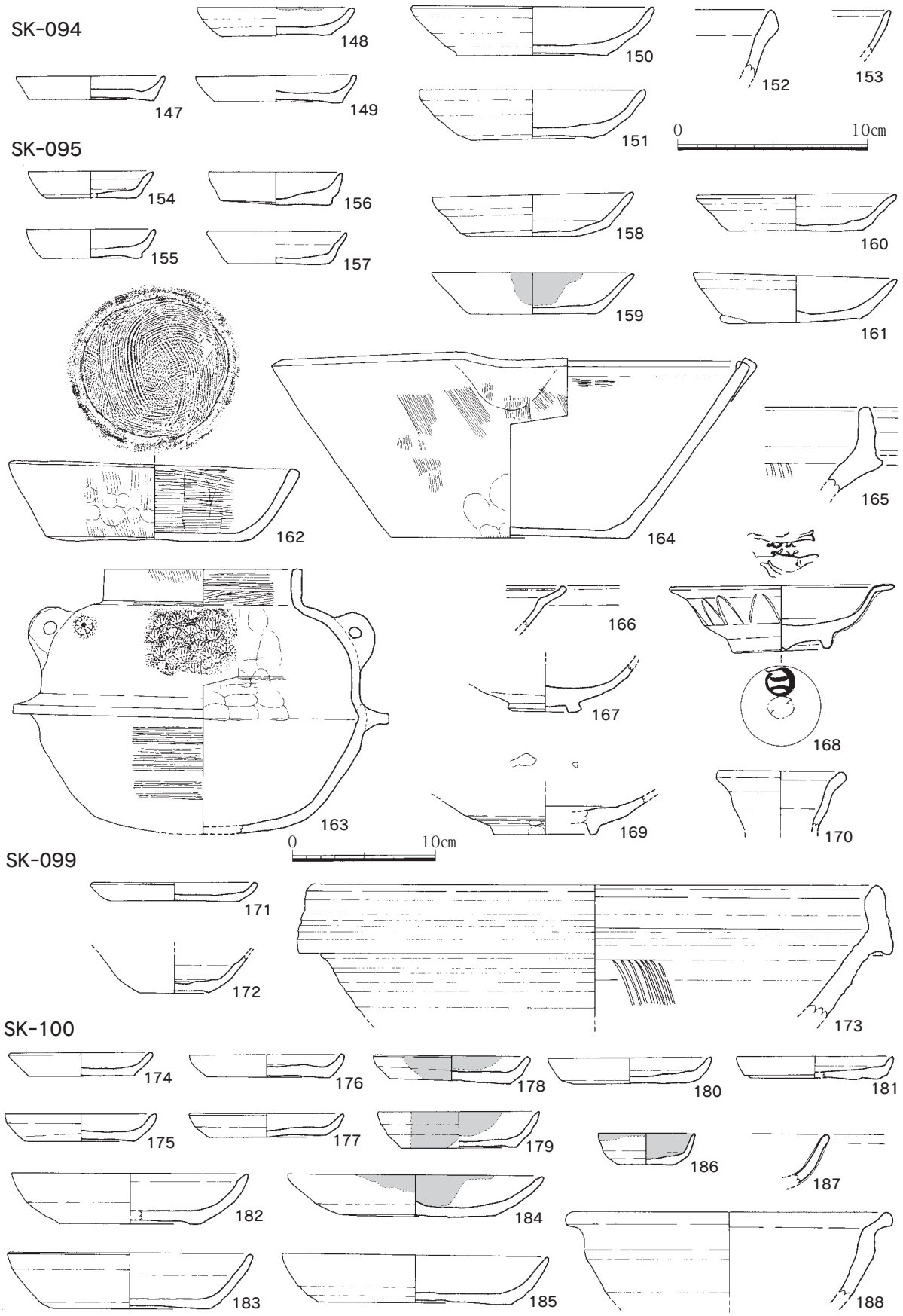


Fig.30　SK-094･095･099･100出土遺物（162～164は1/4、他は1/3）

磁器(宋代白磁、同安窯系青磁、南宋代竜泉窯系青磁、陶器)、瓦が少量出土した。

171は土師器小皿で、口径8.8㎝、器高1.0cm。**172**は白色系土師器小坏である。**173**は備前焼すり鉢である。Ⅴ期に位置づけられる。

出土遺物少なく不明確であるが、16世紀後半代の土坑か。

SK－100　Fig.29、PL.9

第3面のW-2グリッドに位置する。第1面検出の道路SF-030の下層に検出した遺構であり、SF-030の上限年代を知ることができる。平面プランは不整な楕円形で、調査区外へ伸展しており、現状で長径1.8m、短径0.8m以上である。断面形は浅皿状を呈し、深さ0.35mを測る。

SK－100出土遺物　Fig.30

土師器小皿・坏(糸)、瓦器、瓦質土器、国産陶磁器(瀬戸)、中国産陶磁器(宋代白磁、明代竜泉窯系青磁、陶器)がコンテナ1箱出土した。

174～181は土師器小皿で、未図化分を含めた15個体の平均法量は口径8.2㎝、器高1.2cmである。179は他に比べ器高が高い。**182～185**は土師器坏で、未図化分を含めた13個体の平均法量は口径12.9㎝、器高2.5cmである。178・179・184には油煙が付着する。**186**は須恵質土器の小皿で、底部は糸切り。口縁端部に自然釉がかかり、内面全体には墨が付着する。古瀬戸前Ⅲ期～中Ⅱ期の入子とみられる。**187**は明代龍泉窯系青磁皿である。**188**は瀬戸焼の灰釉折縁鉢である。灰白色のやや粗い素地に暗黄緑色～淡青灰色の釉がかかる。古瀬戸編年中Ⅰ期か。

14世紀代の遺構であろう。

SK－107　Fig.29

第3面のW-2～3グリッドに検出した。井戸SE-075に切られ、溝SD-108を切る。楕円形プランで、長径1.1m以上、短径0.95m。断面逆台形状をなし、深さ0.25m。底面は平坦で、北端に浅いピットがある。土師器(糸)、同安窯系青磁片が出土したが、図化できるものはない。

中世後期の遺構であるが、詳細時期は不明である。

(7) 第３面トレンチ出土遺物　Fig.31、PL.9

第3面下層の状況をみるために設けたトレンチの出土遺物である。井戸で寸断されたため、調査区南端からSE-015までをトレンチ1、SE-015内をトレンチ2、SE-015からSE-075までをトレンチ3とした。トレンチ2は遺物が出土していない。また、トレンチ3上層にはSE-111の遺物が含まれる。

トレンチ1（Tr.1）上層(黒色土)出土遺物

土師器小皿・坏・丸底坏(ヘラ・糸)、瓦器(楠葉)、古代・中世須恵器、瓦質・土師質土器、中国産陶磁器(宋代白磁、越州窯系青磁、同安窯系青磁、南宋代竜泉窯系青磁、陶器)、高麗陶磁、瓦、石製品がコンテナ1箱出土した。

189は「ての字口縁」の京都系土師器小皿で、下半部に指押さえ痕が残る。**190・191**は土師器小皿で、底部ヘラ切り。190は口径9.2㎝、器高1.6cm、191は口径9.4㎝、器高1.8cmを測る。**192**も土師器小皿で、底部糸切り。口径8.6㎝、器高1.4cmである。**193・194**は土師器丸底坏で、193は内面にコテあての痕がある。194は口径15.8㎝、器高3.1cmである。**195～197**は瓦器である。195

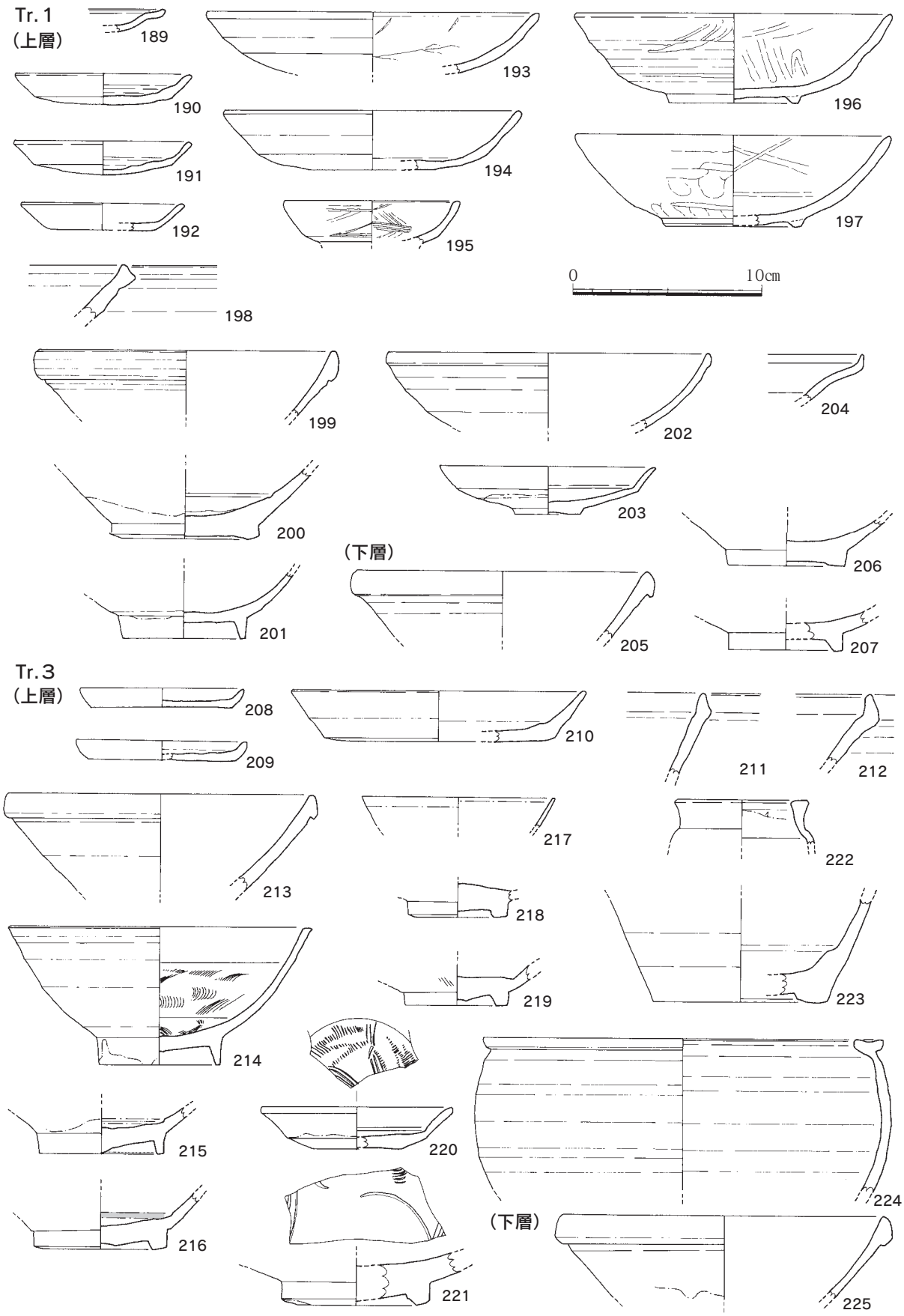


Fig.31　第３面トレンチ１・トレンチ３出土遺物(1/3)

は小皿で、高台が付くと思われる。196・197は筑前型椀でミガキが施されない空間が多い。**198**は東播系須恵器の鉢である。

199～201は福建産白磁碗である。**202・203**は広東産白磁で202は碗、203は皿である。**204**は越州窯系青磁の壷と思われる。

トレンチ1（Tr.1）下層(砂層)出土遺物

土師器小皿・坏、古代須恵器、土師質土器、中国産陶磁器(宋代白磁、越州窯系青磁、同安窯系青磁、陶器)が少量出土した。

205・206は福建産白磁碗、**207**は広東産白磁碗である。

上下層とも古代から12世紀中～後半までの遺物を含み、この時期までの自然堆積層であろう。

トレンチ3（Tr.3）上層(黒色砂質土)出土遺物

土師器小皿・坏(糸)、瓦器、古代・中世須恵器、瓦質・土師質土器、中国産陶磁器(宋～元代白磁、青白磁、同安窯系青磁、南宋代竜泉窯系青磁、陶器)、瓦、石製品がコンテナ2箱出土した。

208・209は土師器小皿で、底部糸切り。208は口径8.6㎝、器高1.0cm、209は口径9.0㎝、器高1.0cmである。**210**は土師器坏で、底部糸切り。口径15.6㎝、器高2.7cmである。**211・212**は東播系須恵器の鉢である。

213～216は福建産白磁碗である。215・216は内底を輪状に釉剝ぎし、釉剝ぎ部分と高台畳付に白泥が付着する。**217**は白磁口禿皿である。**218**は南宋代龍泉窯青磁碗である。**219・220**は同安窯系青磁で219は碗、220は皿である。**221**は青磁碗で、黄褐色の陶胎に黄色半透明釉がかかる。内底に劃花文を施す。**222～224**は中国陶器である。浙江省産と思われる。

トレンチ3（Tr.3）下層(砂層主体)出土遺物

土師器坏(糸)、中国産陶磁器(宋代白磁)が数点出土した。

225は福建産白磁碗である。

13世紀後半～14世紀前半までの遺物を含み、トレンチ1より新しい様相を示す。

(8) その他の出土遺物

土器・土製品　Fig.32～36、PL.10

226～241は外底に墨書のある陶磁器である。226～236は北宋後半～南宋前半の白磁で、226は広東産碗、227～232は福建産碗、233は広東産平底皿、234・235は福建産平底皿、236は広東産壷である。237・238は明代邵武窯白磁皿。239～241は竜泉窯系青磁碗で、239は南宋、240・241は明代で、240は外面に蓮弁文を入れ、内底を円形に釉剝ぎする。226は花押(「置：買の意」か)、228は「王綱」、229は「恵(か)」、230は「船尾」、232は「綱□」、234は「大」、235は「王綱(か)」、237は「㊀」、238は「●」、239は「壮+花押(「置」か)」、240は「㊉」、241は「⚇」と読める。他は判読不能。

242～248は青白磁で、242～246は合子、247・248は碗である。247・248は高台内露胎で、248の外底には黒い円形の窯具痕がある。

249～263は白磁である。249・250は合子身である。251・252は枢府皿で、251は内面に陽印刻文を施す。253・254は碗で、内底を輪状に釉剝ぎする。福建省浦口窯元代の製品と思われる。255～263は明代の皿である。255～257は胎土・釉調の特徴から同じ福建省邵武窯の製品と考えられるが、255は型作りで他の2点の皿に先行すると思われる。いずれも内底に胎土目が付く。256・

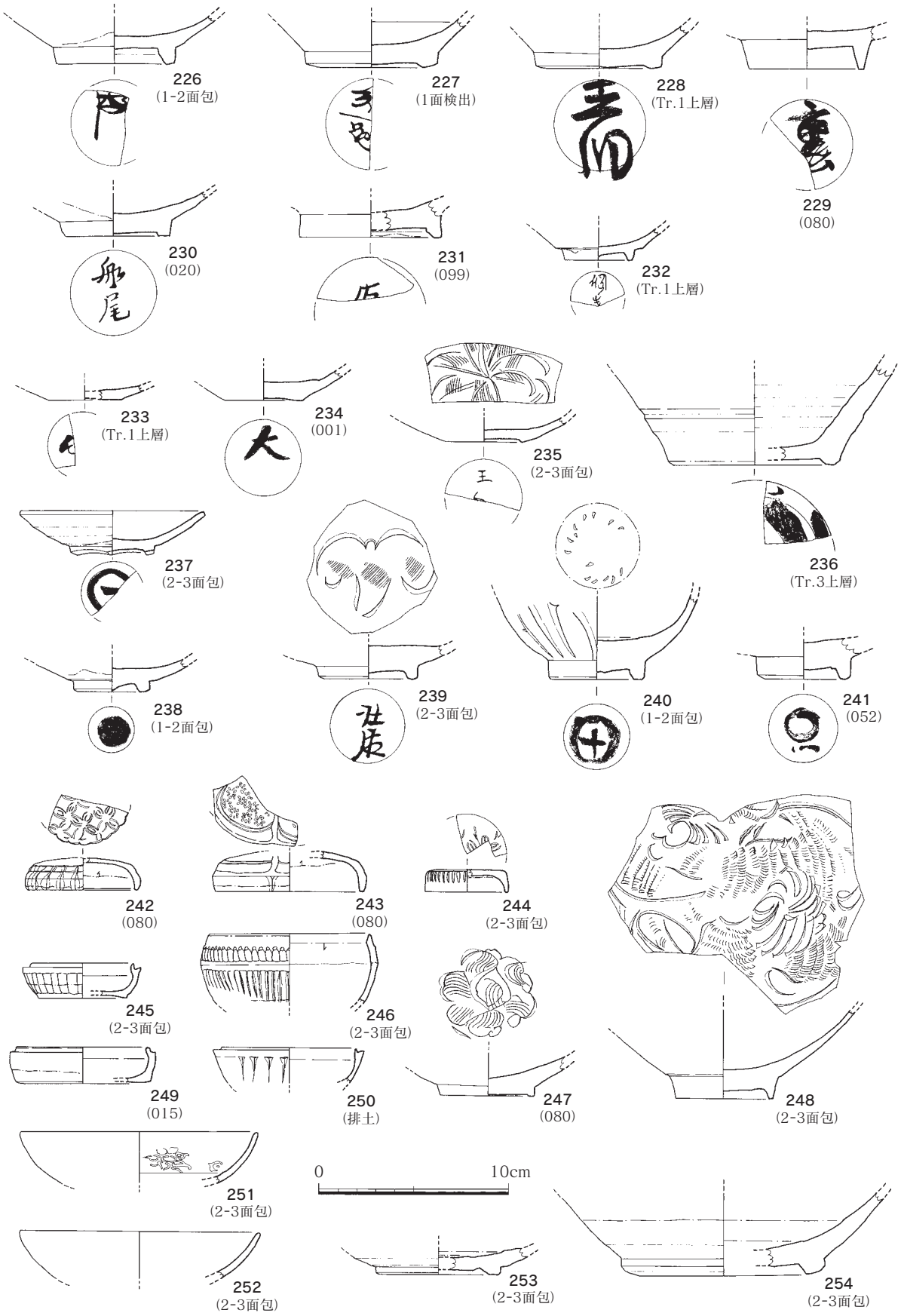


Fig.32　その他の出土土器１(1/3)　　(　　)は出土遺構

257は刳り高台で、256は全釉、257は半釉である。258～262は景徳鎮皿である。262は菊皿で外底に染付による二重圏線が巡る。263は内底に釉がかからず露胎となる。262・263は明代末の製品。

264は藍釉碗で外面は藍釉、内面は透明釉である。**265**は藍釉小壷で外面から口縁部内面までは藍釉、それ以下は透明釉がかかる。

266～278は竜泉窯系青磁である。266は南宋後期の碗で、外面に細身の鎬蓮弁文を施す。267・268は元代の碗で、268は内底に印花文を施す。269～273は明代の碗で、272は高台内露胎で内面にねじ花文をヘラ彫りする。274・275は明代腰折れ皿である。274は小形鍔皿で、外底を輪状に釉

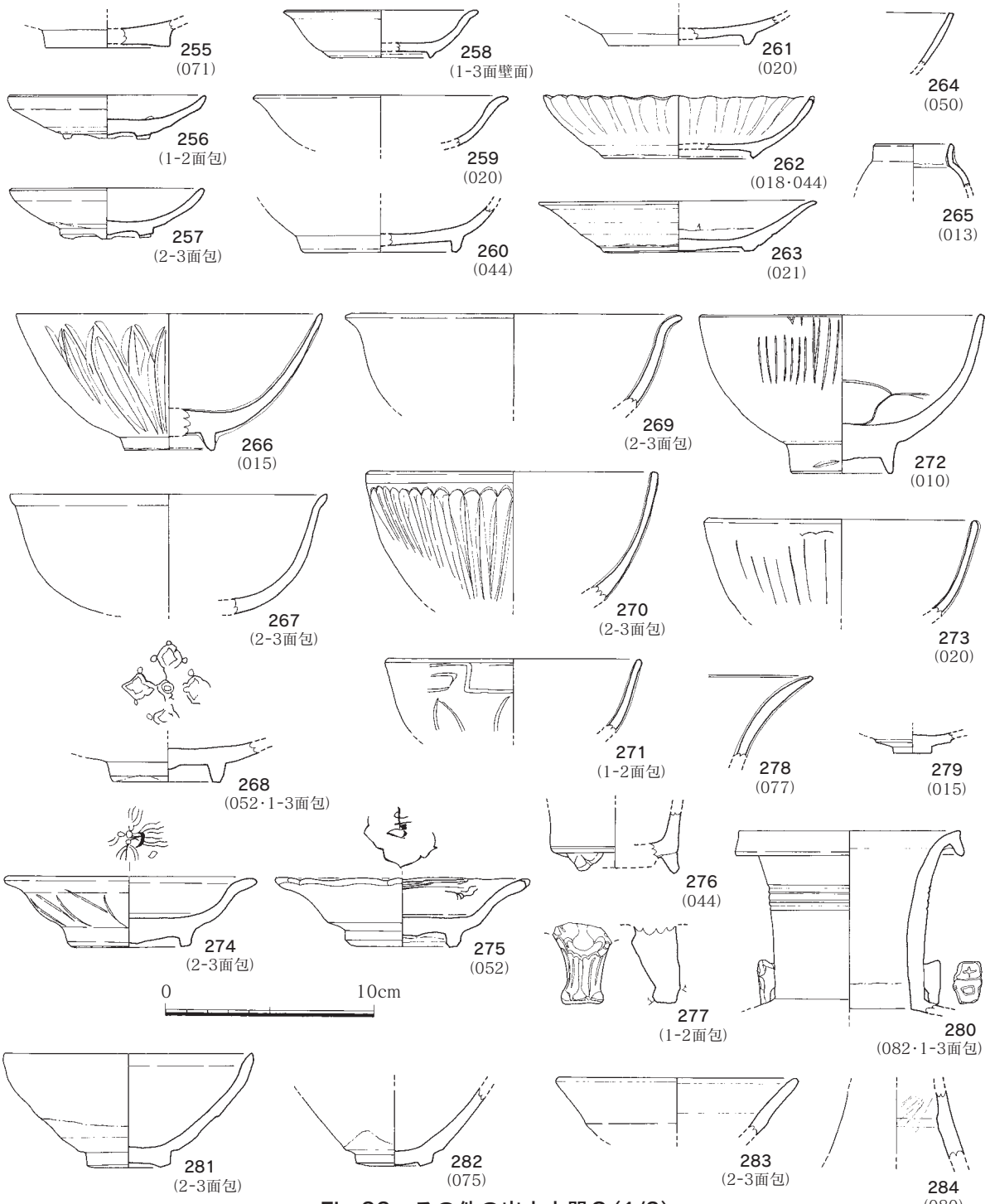


Fig.33　その他の出土土器２(1/3)　(　　)は出土遺構

剝ぎし、外面に蓮弁文、内底に印花文を施す。275は稜花皿で、内底に印花文を施し、高台内途中まで施釉する。276・277は香炉で、277は獣足である。278は南宋後期瓶である。**279**は小形の坏状をなす青磁で全形不明、外面露胎。**280**は青磁壷で、頸の付け根に「吉」の字を陽印刻した耳が付く。

281～**284**は天目である。281～283は碗で、283は白縁である。284は吉州窯の瓶である。

285～**296**は明代青花である。285～288は碗、289～291は皿である。285は明代前半の端反り口縁碗と思われるが、高台内面を丸く削り出しており、一般的なそれと異なる。291は稜花口縁で外面に縦ヘラ彫りによる蓮弁文を施す。292～296は漳州窯明代末の製品である。292は碗で、外面半釉、内底を露胎とする。293～295は盤で294・295は畳付に砂粒が付着する。296は五彩盤である。

297・**298**は高麗青磁碗である。298は粗製品で外底に半月状の砂目が付く。**299**～**301**は高麗～朝鮮王朝変換期の象嵌青磁で、いずれも白化粧土による印花象嵌を施す。299は皿である。全釉で外底にヘラ状工具による押圧痕がある。300・301は壷で同一個体であろう。全釉で外底に砂粒が付着する。**302**～**306**は朝鮮王朝陶磁である。302は軟質白磁碗である。303～306は緑褐釉陶器で、303は瓶、304は広口壷、305は甕、306は鉢である。306は内面に一本ずつスリ目状の刻線を入れる。

307は陶器壷である。細かな白色と黒色の砂粒を含む明赤褐色の粗い土で、内面にハケで塗布した釉の痕跡がある。タイ産と思われる。

308は瀬戸焼黄釉卸皿で外面口縁付近から内面途中まで施釉する。古瀬戸編年の中Ⅲ～Ⅳ期に属するものか。**309**は瀬戸・美濃天目碗である。釉下には鉄泥が施されたとみえ、外面に痕跡が窺われる。**310**～**312**は須恵質の甕である。310は灰白色の粗い瓦質っぽい胎土で、肩部に平行タタキを施す。十瓶山系須恵器か。311は灰色のざらつきのある胎土で器面は黒いテリがあり、口縁上面に浅い凹みがある。渥美陶器か。312は肩部に平行タタキ、頸部内面は小刻みにヘラ削りされる。東播系須恵器か。**313**は黒釉壷である。黄褐色のがさついた胎土で外面のみ施釉する。釉下には鉄泥を薄くかける。刳り高台になる。国産とみられるが産地は不明。**314**～**318**は備前焼である。314～316はすり鉢で、314は備前焼編年ⅣB期、315・316はⅤ期に比定される。317は浅鉢、318は壷である。318は口縁部に蓋の受け部を作り出す。317・318は胎土の状況から備前焼としたが確証はない。

319～**322**は古式土師器で、著しく摩滅する。319～321は甕、322は支脚である。

323～**336**は古代の須恵器で、323～333は蓋坏、334は小壷、335・336は甕である。

337～**339**は楠葉型瓦器椀で、口縁端部に沈線が巡り、ミガキは非常に精緻で、充分に還元焼成され銀化するものもある。**340**・**341**は筑前型瓦器椀で、高台は低く小さく、ミガキの隙間が多い。

342～**345**は白色系土師器杯である。外底はいずれも糸切り離し。薄手で内面にはロクロ痕が強く残る。搬入品であろうか。

346は軒平瓦の瓦当である。左右を欠失しており、内区中央に「天」の凸文字を配している。

347は算盤玉様の小形容器で、焼成前に底部穿孔する。径3.6～3.8㎝で外底は糸切り離し。玩具か。**348**・**349**は土鈴である。348は肩部に細い線刻を施し、349は中位に沈線を巡らす。**350**～**355**は土錘で、350は35g、351は18g、352は3g、353は7g、354は12g、355は5gを測る。**356**は棒状を呈し中実。やはり錘か。重さ32g。**357**～**360**は周縁を打ち欠き、或いは磨って円形に仕上げた所謂「瓦玉」である。357～359は瓦、360は瓦質土器鉢の破片を使用する。

361・**362**は土製のフイゴ羽口である。361は断面円形、362は方形を呈し、どちらも先端が激しく溶解する。鉄滓とともに調査区南側の各遺構から散漫に出土したが、製鉄遺構に伴うものではない。

363は土製鋳型で、銅製容器385に類似した容器の把手から本体の一部に相当する部分であろう。**364**も土製鋳型で、中央に方形孔を開けるが、断面はレンズ状に厚みがあり、銭ではあるまい。

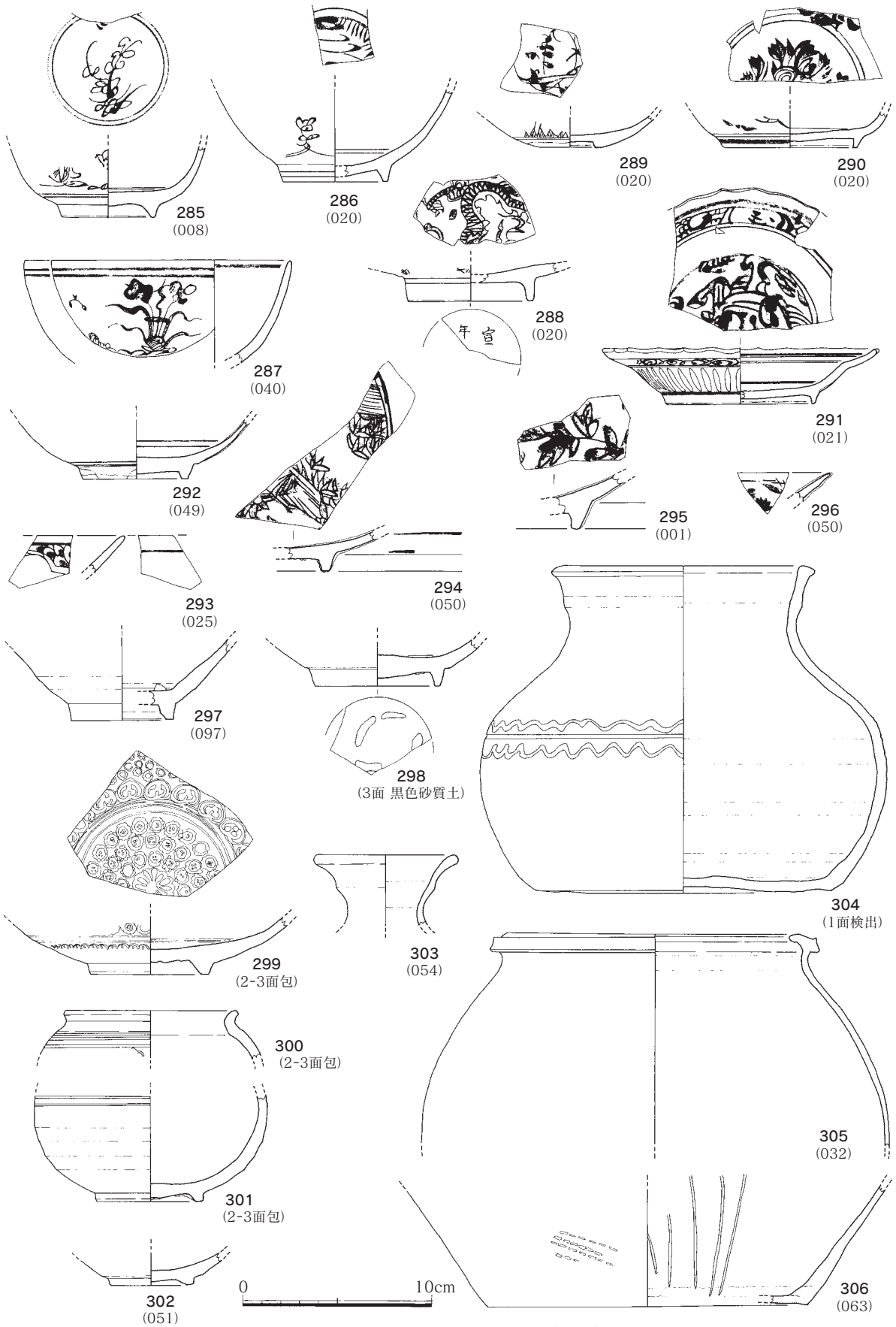


Fig.34　その他の出土土器３(1/3)　　(　　)は出土遺構

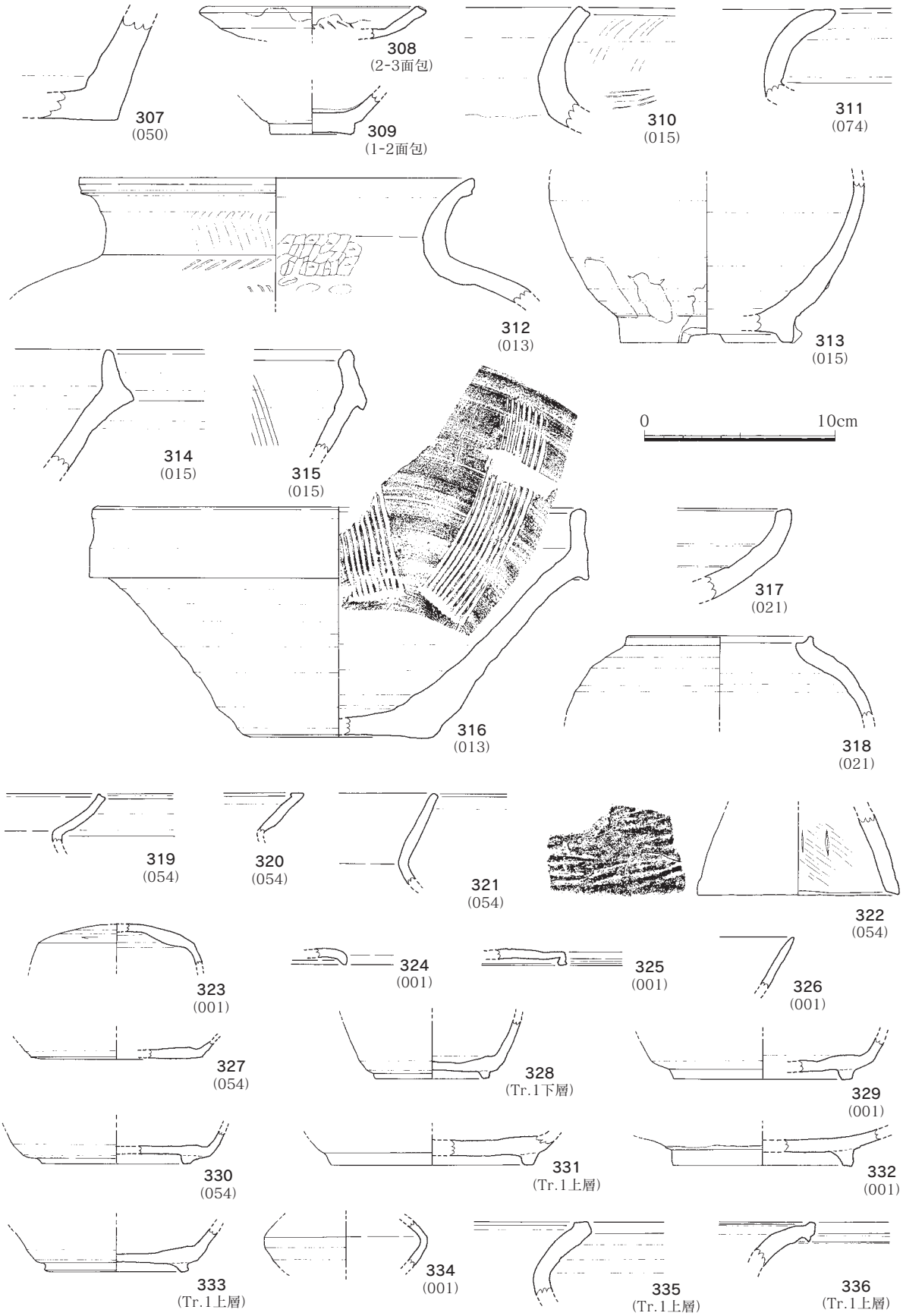


Fig.35　その他の出土土器４(1/3)　　(　　) は出土遺構

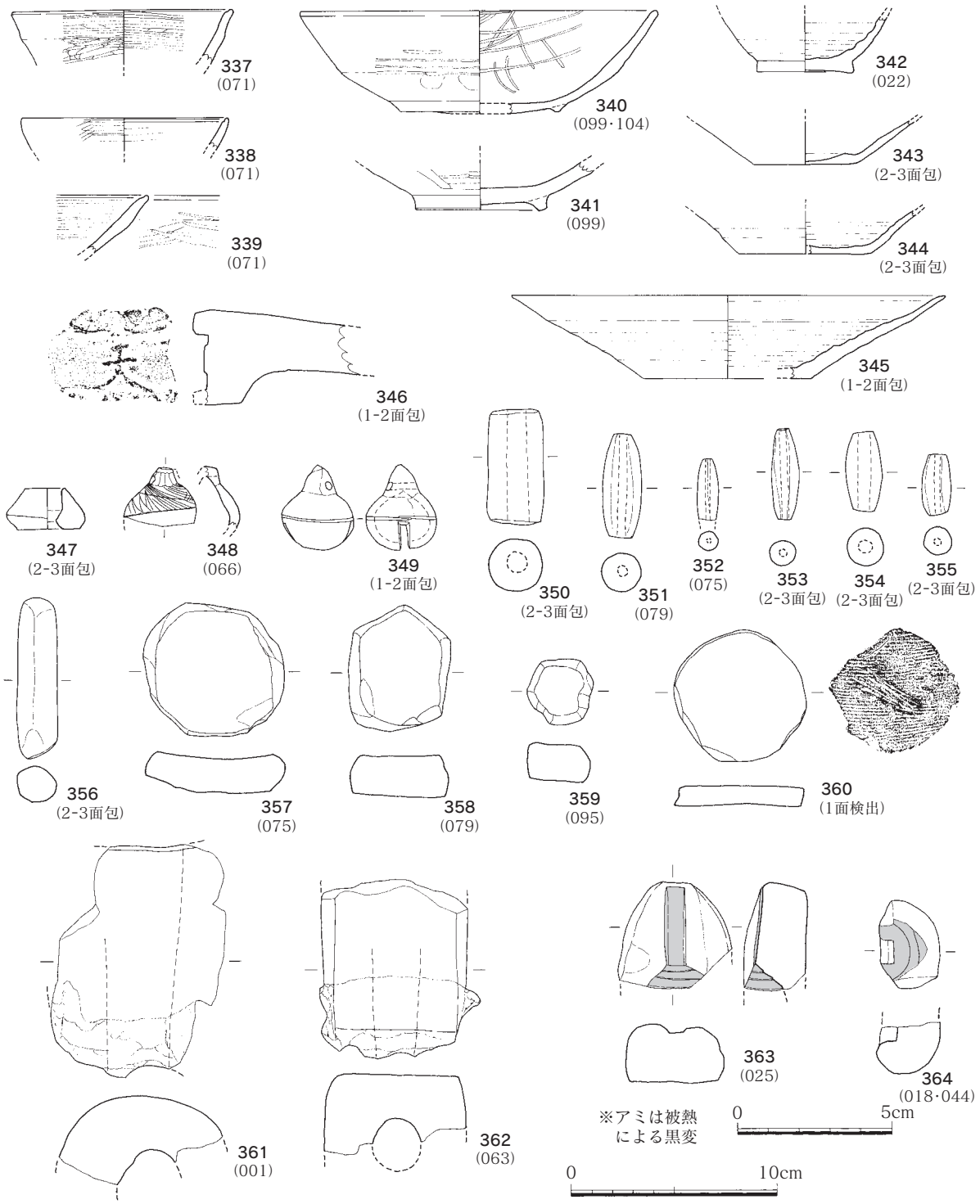


Fig.36　その他の出土土器５・土製品（363・364は1/2、他は1/3）　（　　）は出土遺構

石製品・金属製品・ガラス製品　Fig.37・38

365～368は滑石製石鍋片である。366は鍔の無い特異な器形で、368は左側を切っている。**369・370**は滑石製スタンプで、369には平たい滑石の片面に花文を線刻し、370は素文で鈕に穿孔するが折れている。**371**は滑石製の小容器で、舟を模す。**372～375**は碁石とみられ、375のみ灰色で他は黒色の石材を用いる。**376～380**は砥石である。376は大型品の一部、他は小型である。後三者には刃物傷が顕著に残る。**381**は大振りの石硯で、墨痕が僅かに付着し、刃物でつけた傷がある。

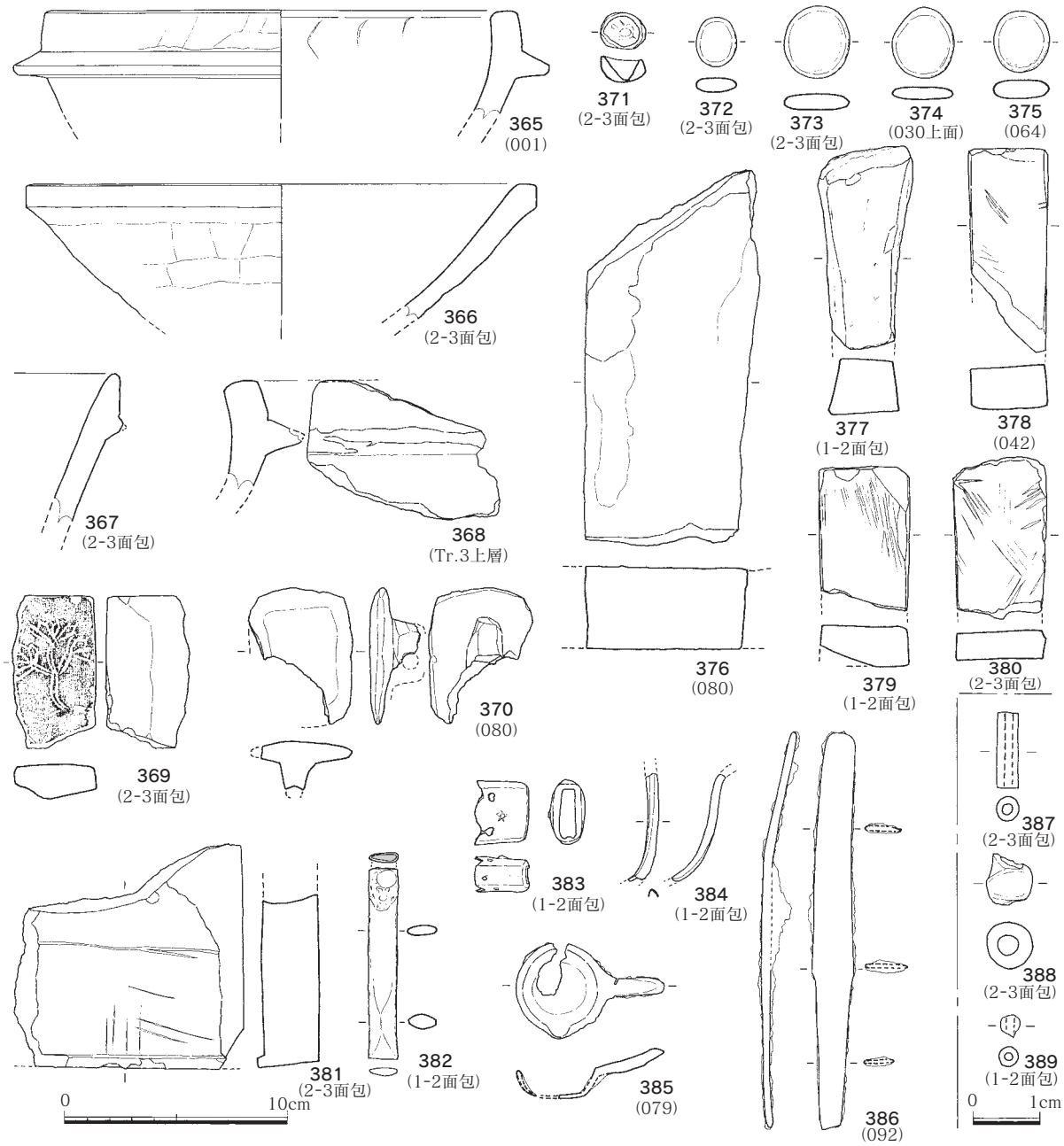


Fig.37　石製品・銅製品・鉄製品・ガラス製品（387～389は1/1、他は1/3）　（　　）は出土遺構

382は銅製品で、上端は鉄を巻き込んでおり、表裏に不明瞭な菱形の凹凸を施す。刀子柄か。**383**は銅製の石突で、尻に孔をあける。表裏に計4つの透孔と、背面に一孔を入れ、片側面に釘が残る。**384**は銅製の覆輪の一部である。**385**は銅製の小形容器で片口と把手が付く。**386**は刀子様の鉄製品だが、刃部が鋭利ではなく、コテか。**387**は石製の管玉。**388**はガラス製小玉、**389**はガラス製粟玉。

Fig.38は銅銭である。銅銭は35点が出土し、判読可能なもの16点、一部が判読可能なもの3点、判読不能のもの16点がある。うち、判読可能な15点の拓影を示した。永楽通寶は2点出土した。

動物遺存体（埋蔵文化財第1課　屋山洋）

動物遺存体の取り上げ時にフローテーション等は行っていない。同定した54点の内訳は、海棲哺乳類約20%、イノシシ・シカ20%強、ウシ・ウマ約11%、マグロ類9%（5点）である。博多遺跡群で

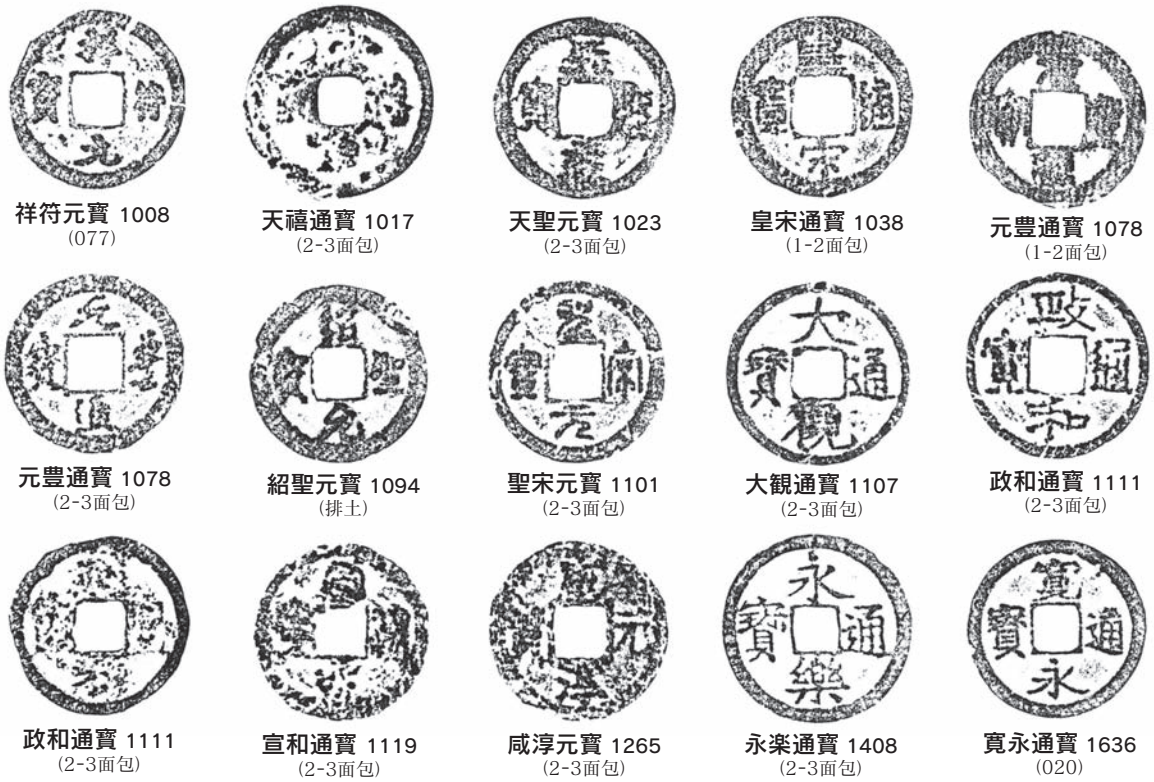


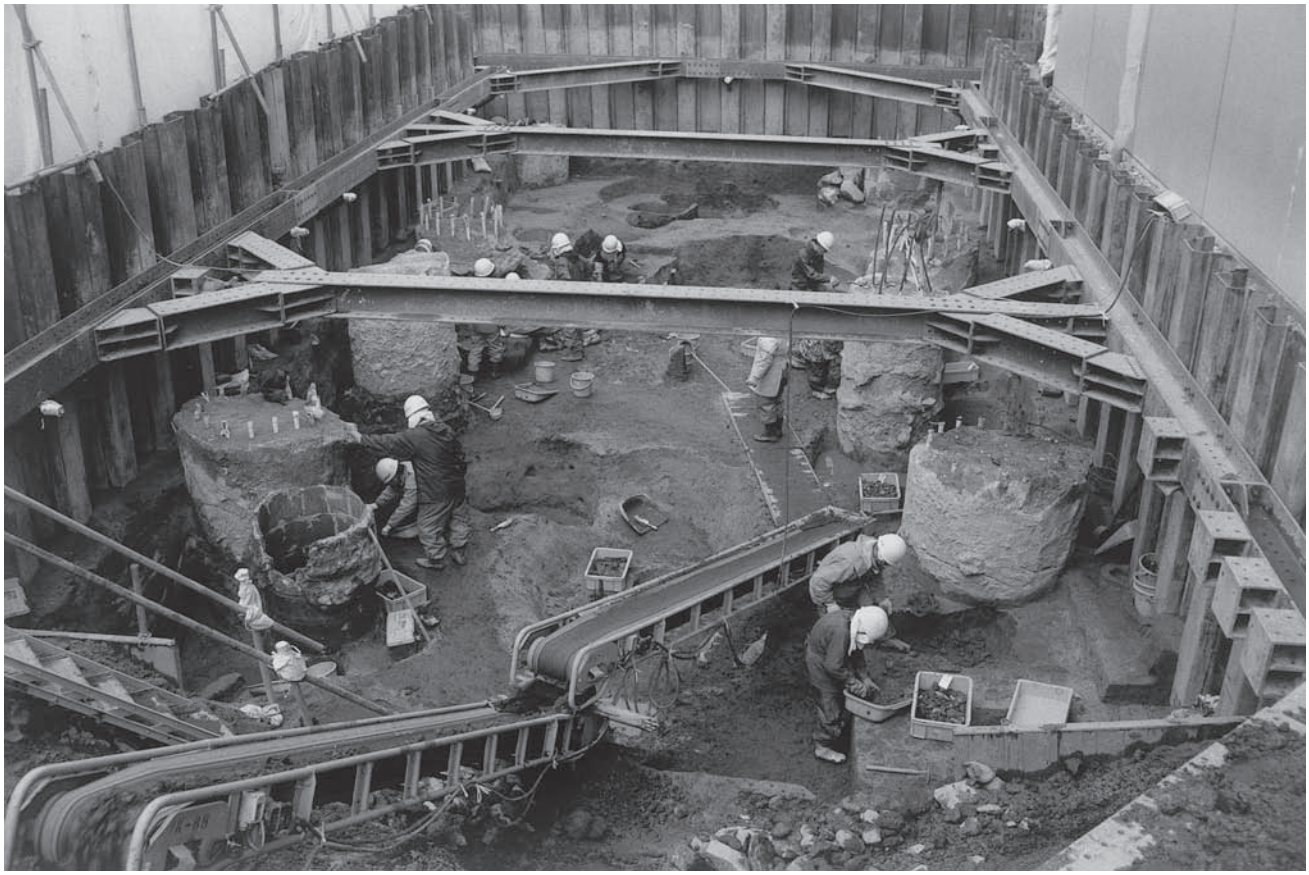
Fig.38　銅銭(1/1)　　数字は初鋳年、（　　）は出土遺構

は中世後半になると海棲哺乳類が陸棲哺乳類に比べて多く出土するが、今回は哺乳類中の24%と少なめである。また、骨角器材が4点出土しており（鹿角2点、鹿角加工品1点、鋸痕跡があるイルカ下顎1点）、近隣に生産工房の存在が示唆される。（＊1cm角以下の不明獣骨はカウントしていない。）

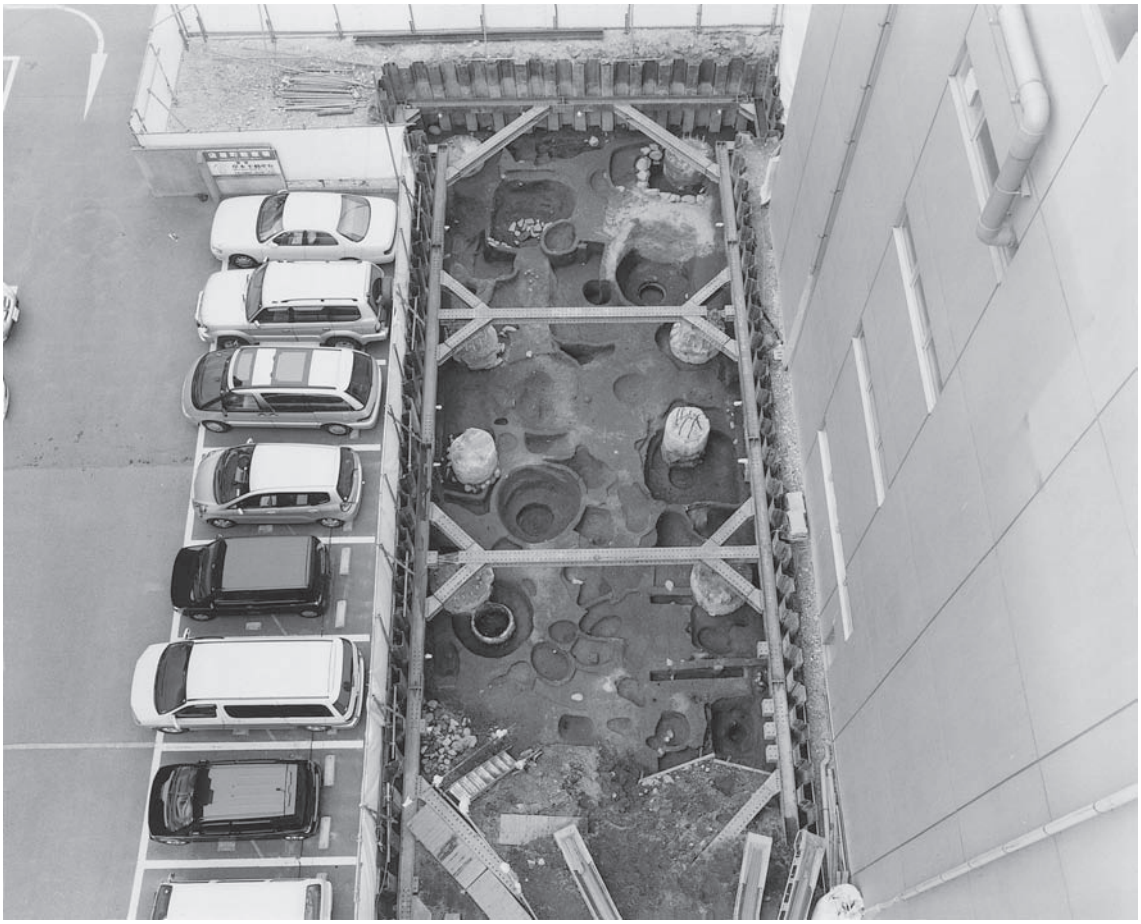
第三章　おわりに

報告した遺構は、中世後期の建物遺構2、道路遺構1、溝1、井戸4、石積み土坑2、土坑14である。検出遺構にはこの他、中世とみられる土坑29、小ピット15、近世以降とみられる井戸4、土坑3がある。遺物は古墳時代前期の古式土師器や奈良時代の須恵器が少量あるが、伴う遺構はない。最も古い遺構は、土坑SK-094・100で14世紀代と考えられるが、数が少ない。次に、井戸SE-111が15世紀後半～16世紀前半代に比定され、16世紀に入ると道路SF-030など今回報告した遺構の大半が含まれる。今回の調査では博多遺跡群の基盤砂層は検出されず、第一章3で述べたように砂丘が北西へ落ちた旧河川内に位置するものと考えられる。また、第二章2で述べたように、調査区の南北で土層堆積状況が大きく異なっており、砂丘に近い南側約1/3は1.5m以上に及ぶ混じりけの少ない黒褐色粘質土（下位は砂質土）が厚く堆積することから、一気に埋め立てられた状況が考えられ、他方の北側は湿地状堆積土の上部に数十cm単位の厚さの整地土が被ることから徐々に埋められた状況を示している。これらの整地層下の自然堆積層に対して設けたトレンチでは、南側のトレンチ1で12世紀後半までの遺物が、北側のトレンチ3で13世紀後半ないし14世紀前半までの遺物が出土し、時期差がある。以上のことから、当調査区は波打ち際に位置しており、12世紀後半以降にまず南側が一気に埋め立てられ、14世紀前半以降には全域が陸化していたが、積極的に利用を受けるような土地ではなく、徐々に埋立てが進んで15世紀後半以降に生活適地として全域が利用可能となったと考えられよう。

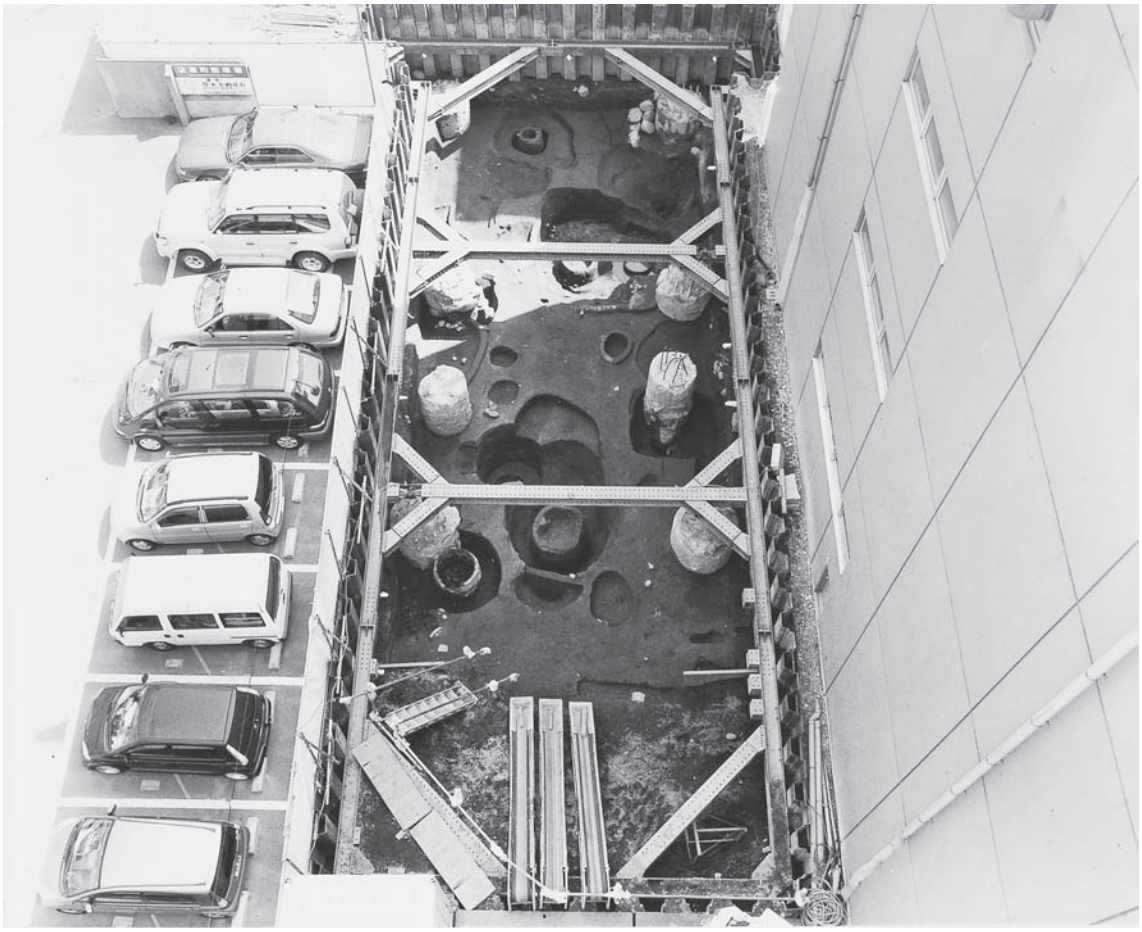
PLATES
（図　版）



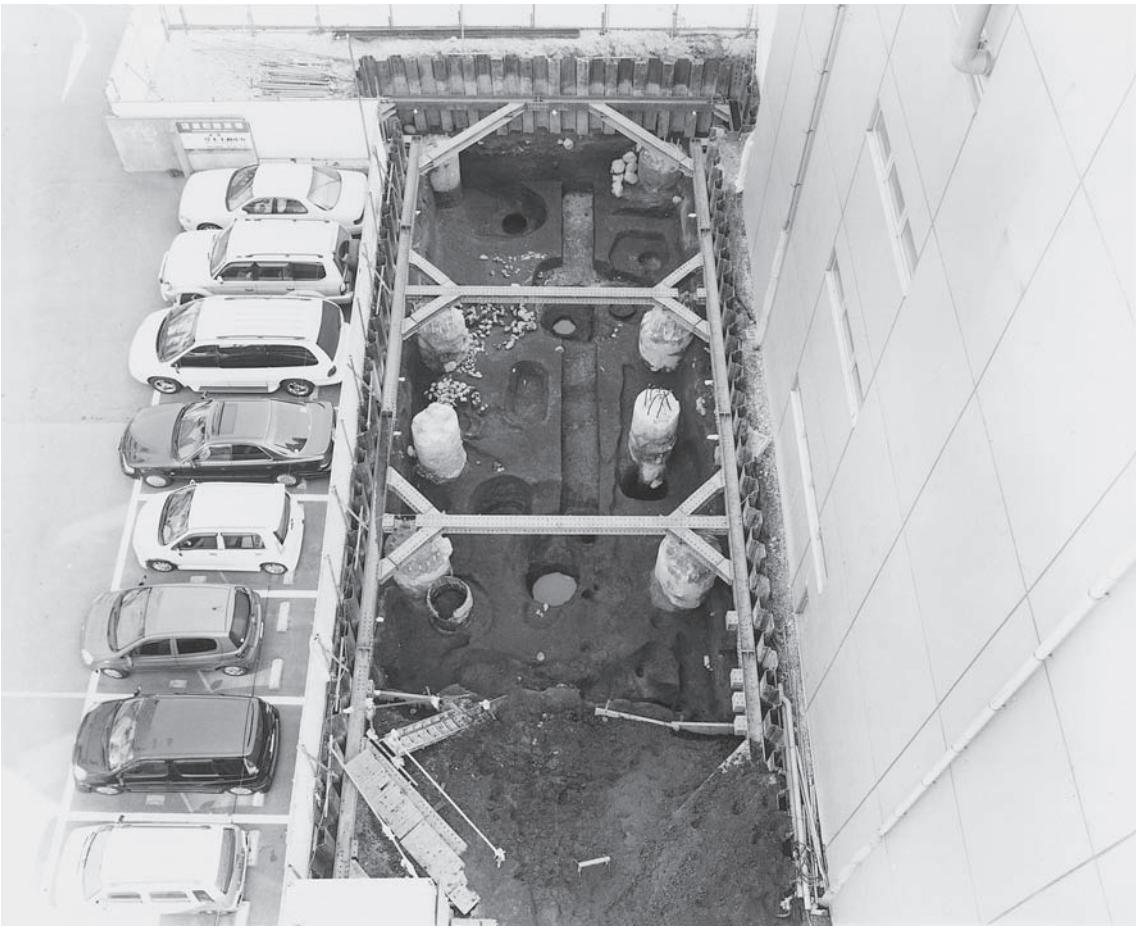
調査風景（北西から）



1．第１面全景（北西から）



2．第２面全景（北西から）

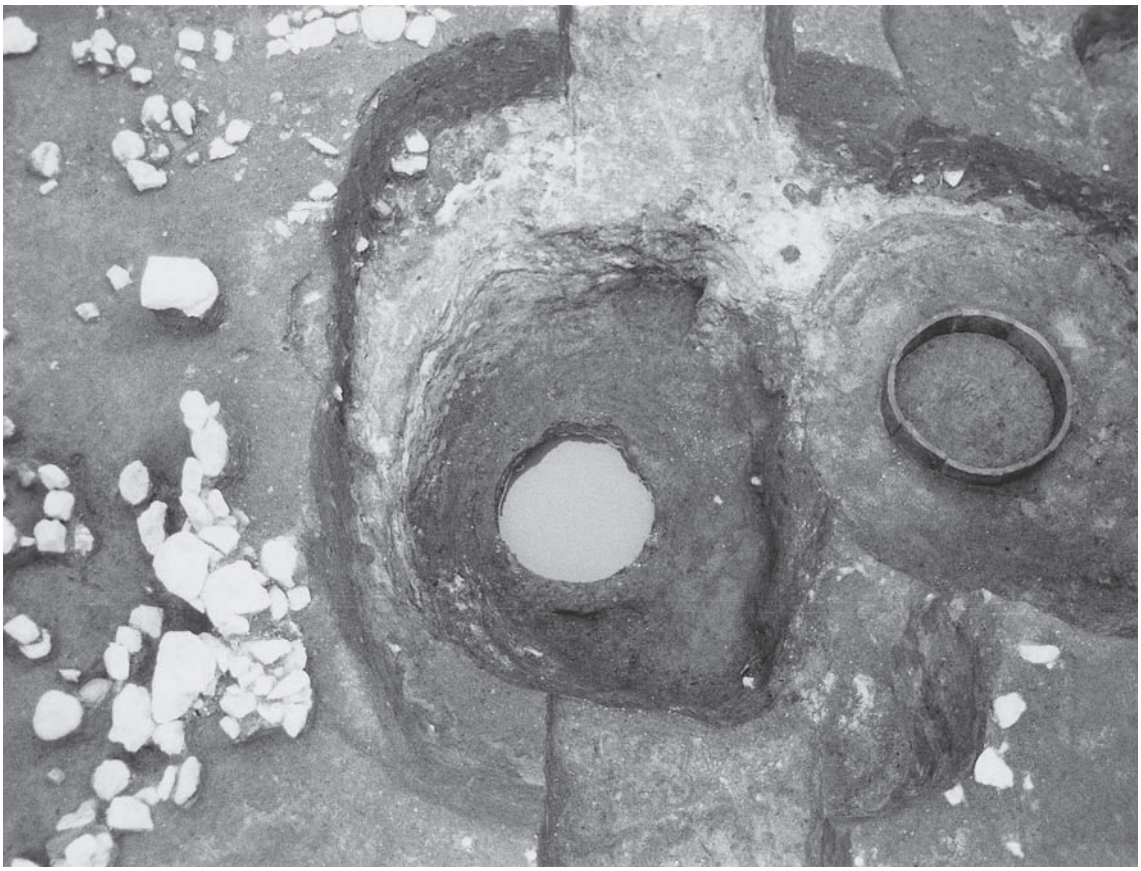


1．第３面全景（北西から）

2．SB-112（南から）

1．SF-030検出状況（北西から）

2．SF-030掘り下げ後（北西から）



1．SE-015完掘後（北西から）

2．SE-020井側検出状況（北から）

1．SE-075井側検出状況（南から）

2．SE-075井側（南から）

1．SE-080井側検出状況（北から）

2．SE-111井側検出状況（北から）

1．SK-005（南から）

2．SK-023（南東から）

1．SK-079（南から）

2．SK-079（北西から）

3．SK-002（南東から）

4．SK-077（北東から）

5．SK-078（南西から）

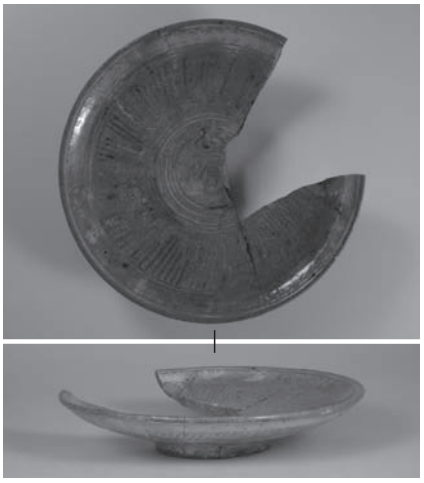
1．SK-094（南から）

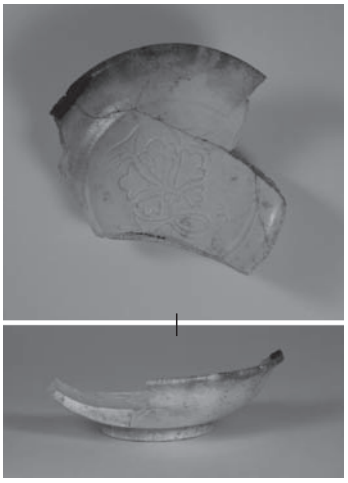
2．SK-095（南西から）

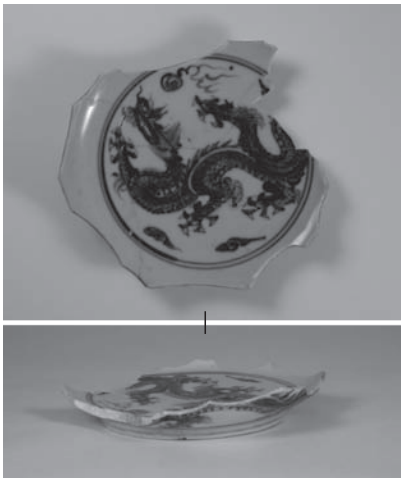
3．SK-099（北西から）

4．SK-100（東から）

5．第3面トレンチ（西から）


43


69


87

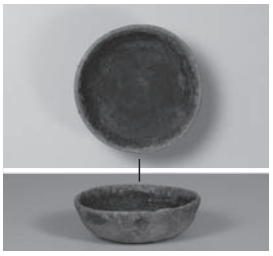
65

71

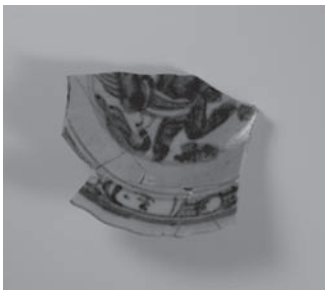
89

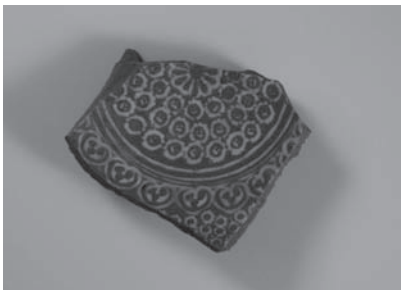
163

118


186

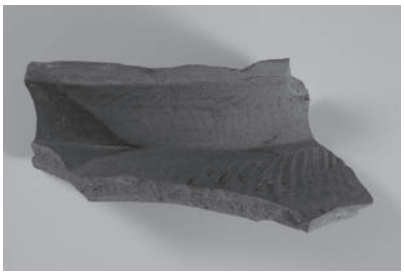
162


291


299

304

307


312

363

364

出土遺物（縮尺不同）

報告書抄録

ふりがな	はかた 116
書名	博多 116
副書名	
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第946集
編著者名	吉武　学、田中克子
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神1丁目8-1　　電話番号　092-711-4667
発行年月日	2007年3月31日

ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
はかた いせきぐん 博多遺跡群 だい159じ 第159次	ふくおかし はかた く 福岡市博多区 てんやまち 店屋町 102、103－1 102、103－1	40130	0121	33°35′44.80″ 世界測地系	130°24′34″ 世界測地系	20060210 ～ 20060410	190	共同住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群 第159次	集落	中世後期	建物遺構2＋道路1＋溝1＋井戸4＋石積み土坑2＋土坑43＋ピット15	土師器＋須恵器＋陶磁器＋土製品＋銅製品＋ガラス製品＋鉄製品＋石製品	中世後期を中心とする貿易都市
		近世	井戸4＋土坑3	国産陶磁器＋瓦	

博多 116

－博多遺跡群第159次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第946集

2007年(平成19年)3月30日

発　行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印　刷　株式会社ナガシマ

福岡市博多区豊1丁目9-18